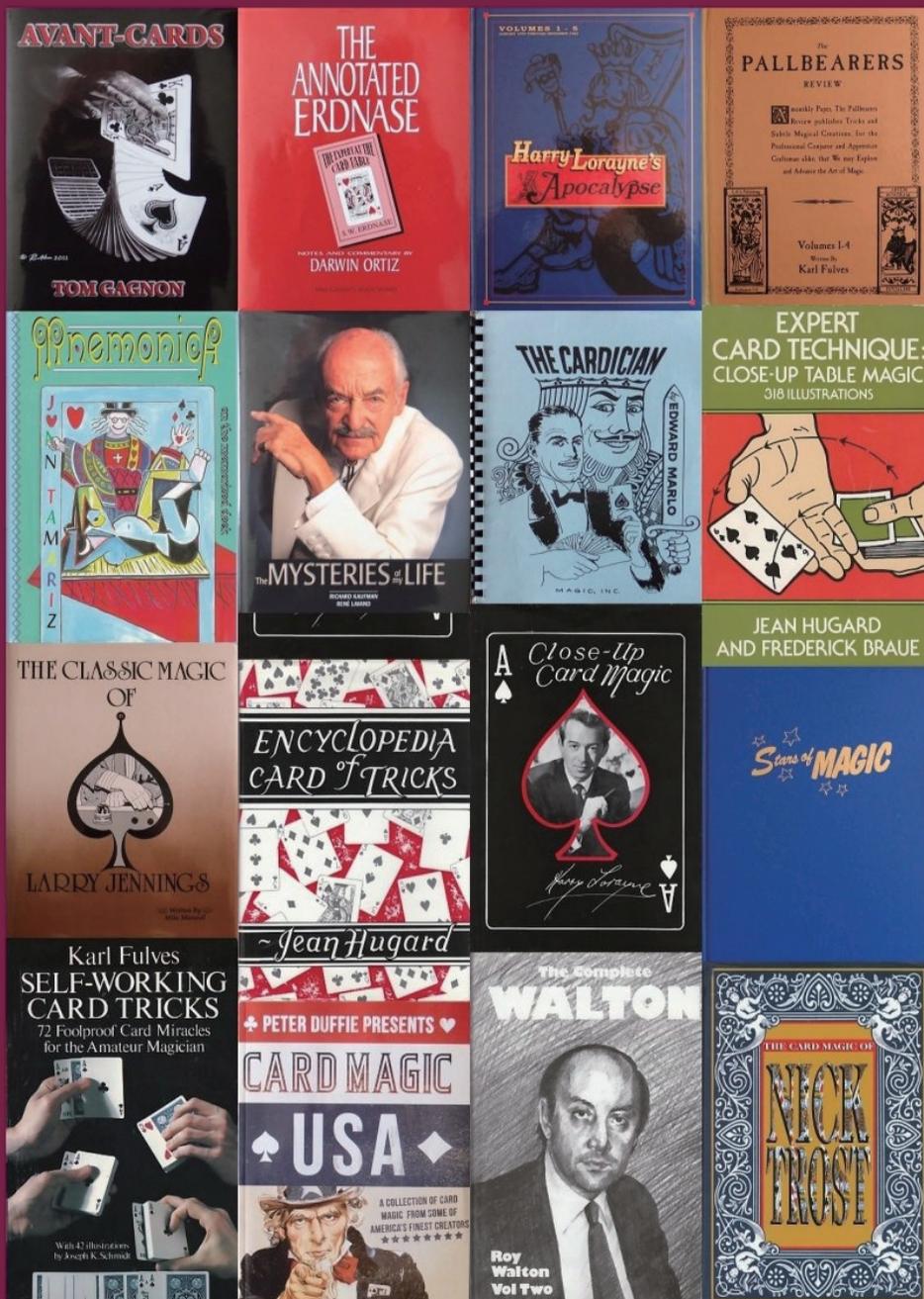


Card Magic Magazine



No. 18

October 6, 2013

by Hideo Kato

カードマジック徹底研究

ギャンブルトリック

Part 1 スリージャックディーラー

‘スリージャックディーラー’と呼ばれるディーリングトリックのジャンルがあります。デッキのトップから2人に3枚ずつ配ると、つねに相手の3枚が3枚のJになるという現象です。3枚ずつ配るので厳密にはギャンブルトリックとは言えないかもしれませんが、“ギャンブラーが自由にカードを配れるというのを見せる”という話をしてから演じますので、ギャンブルトリックのひとつとして収録いたしました。

ジャックジャックジャック

= 考案者不明、“カードトリックスユーウィルドゥー”、1922年 =

これは私が見つけた中でもっとも古い、‘スリージャックディーラー’が記述されたものです。起源はもっとさかのぼるに違いありません。

* 準備 *

トップよりJ、J、J、X、J、、、とセットしておきます。Xは何でもよいカードです。Jのマークは著者ルーファス・スティールの解説では、JH、JC、JS、X、JDとなっていますが、これは配られた3枚のJが1回目と2回目で、赤2枚に黒1枚という組合せになるからです。そのことを気にしなければ、マークは適当でかまいません。

* 方法 *

「自由にカードを配ることのできるギャンブラーの技をお見せしましょう」と言って、相手と自分に交互に3枚のカードを配ります。相手に先に配り始めます。そして自分の3枚目は置かずに、そのカードですでに置かれている2枚をすくい上げて取り、それら3枚をデッキのトップに戻します。相手の3枚を表向きにすると、全部Jです。それら3枚をトップにのせます。

「もういちどやってみましょう」と言って、以上と同じことを行えば、同じように相手の手に3枚のJが配られます。その都度、3枚のJの組み合わせが変化しますので、Jをあまりじっくり見せずに、ちらっと見せてトップに戻すようにします。

*** 備 考 ***

1 回終わるとつぎに繰り返せるセットになっているので、永久に繰り返せます。しかしそれが手法的には面白いところではありますが、「このマジックには終わりが無い」と昔から言われています。

インブルーブドスリージャックディール

= ウォルター・ギブソン、“セルフワーキングカードトリックス”、1976 年 =

’スリージャックディール’の原案では、3 回以上繰り返すと、2 枚の黒い J と 1 枚の赤い J が現れたり、1 枚の黒い J と 2 枚の赤い J が現れたりして、相手に変化が気づかれやすいので、その点を改善したのがこの方法です。

*** 方 法 ***

トップから赤い J、黒い J、赤い J、X、黒い J とセットしておきます。

相手にディールされた 3 枚の J を表向きにすると、上から赤、赤、黒となります。上の赤い J を取って、それで他の 2 枚をすくって取り、3 枚を裏向きにしてトップにのせます。

このようにすれば、スペードとクラブは入れ替わりますが、つねに赤 2 枚、黒 1 枚が現れます。

スリージャックス & パット

= フィル・ワイズベッカー、雑誌“フェニックス”、1943 年 12 月 31 日号 =

終わりのないトリックと言われてきた ’スリージャックディール’ に、見事なエンディングが加えられた作品です。

*** 方 法 ***

トップより、JS、JC、JH、AS、JD、KS、AC、QS、AD、10S とセットしておきます。

原案と同様に 3 回のスリージャックディールを行いますが、J を取り上げるとき、黒い J を赤い J の間に移してから取り上げます。

「最後に、5 枚ずつ配るポーカーでやったらどうなるか見てみましょう」と言って、相手から始めて 5 枚ずつ配ります。相手の 5 枚を開けると J と A のフルハウスです。「このようなギャンプラーのテクニックに対抗するには、マジシャンは魔法を使えばよいのです」と言って、自分に配られたカードに魔法をかけ、表向きにしてロイヤルフラッシュであることを見せます。

スリージャックス

=リン・サールズ、雑誌“ポールベアラーズレビュー”、1973年秋号=

スリージャックディールの形式を使っていますが、3枚のJが配られ続けるのではなく、相手に配られる手が次第によくなっていき、そして最後にどんでん返しがあるという、単調だったスリージャックディールが立派な作品となりました。

* 準備 *

トップから順に、9、K、8、J、10、Q、J、A、Jとセットします。しかしながら、ポーカートリックにおいては、この程度の枚数のセットは、適当なセリフで説明しながら演技中に行ってもおかしくありません。「ギャンブラーの手口をお見せしましょう。彼等はカードを密かに準備してきました」と言って、カードのセットを行います。「それから彼等はカードを秘密の場所に隠します」と言ってフォールスシャフルします。そして演技に続けます。

* 方法 *

「ふつうポーカーは5枚カードを配りますが、わかりやすいように3枚でやります」と言って、相手から始めて、相手とあなたと交互に3枚のカードを配ります。そして相手の3枚を見せて8から10のストレートを見せます。「ストレートです。悪くはない手ですね」と言って、相手の3枚をあなたの3枚の上へのせ、それら6枚をデッキのトップへのせます。

「もういちどやりましょう」と言って、まえと同じことを行います。こんどは相手の手には9、10、Jが現れます。これをあと2回繰り返し、J、Q、Kを表向きにして見せるとき、このミスディレクションにより、デッキをあなたに配られたカードにのせてしまいます。そして相手の3枚をトップへのせます。

もういちど相手とあなたに3枚ずつ配ります。相手はQ、K、Aを得ました。「ストレートの中でもいちばん強い手ですね。でもあなたは勝てないのです。3枚のポーカーでは、スリーカードのほうが強いのです」と言って、あなたの3枚を表向きにして、3枚のJを見せます。

ホップステップジャック

= 加藤英夫、“研究ノート”、1997年9月13日 =

これもスリージャックディールにクライマックスを加えたものです。クライマックス部分は、エルムズレイの’アンダーワールド’のフォースの原理を利用しています。テクニックは、私のボトムトップディールを使います。

* 方法 *

スリーカードディールを3回演じます。3回目のディールにおいて、相手にディールする3枚目のJを右手で取るとき、少しトップ近くをルーズに広げておきます。そして3枚目を相手にディールするとき、左手はトップから2枚目の下にブレイクを作ります。そして自分に3枚目をディールするとき、ブレイクによってトップの2枚を取り、その2枚ですでにディールしてある2枚をすくい取ります。左手はデッキをテーブルに置き、いますくい上げたカードを取ります。右手で相手にディールした3枚を表向きにして、3枚のJを見せます。

「どうしてJが出てくるかという、じつは、どのカードを取ってもJになるようになっているのです。それを証明してみましょう」と言って、左手のカードを表向きにして、プッシュオフカウントによって3枚のJでないカードに見せます。「こちらはJではないカードです」。いちばん下のカードをいちばん上に置きます。Jはいちばん下に隠れています。

カードを閉じて裏向きにして、上の2枚を広げて3枚のファンに広げます。下の2枚が重なっています。テーブルから1枚のJを取って、裏向きに左手のカードの1枚目と2枚目の間にさし込んで、半分アウトジョグさせておきます。2枚目のJを取り、同様に2枚目と3枚目の間に半分アウトジョグさせて入れます。3枚目のJは1枚目の上にアウトジョグさせます。「Jとそうでないカードを交互にしました」と言って、カードをゆっくりそろえます。

「これからあなたにJとそうでないカードのうち、好きな方を選んでいただきます」と言って、トップの2枚をはっきりと右手に取り、左手と右手の指先でその2枚を上下に何回か入れ替えどちらがどちらかわからなくします。そして2枚をテーブルに左と右に置き、「好きな方を取ってください」と言って、どちらかを選んで相手の近くに置かせます。裏向きのまま置いておきます。残った1枚の上に手元のポケットをのせ「残ったカードは下に置きます」と言います。

つぎにトップから2枚取ると見せて、ボトムトップディールを行います。この技法の詳細は備考を参照してください。トップの2枚を取ると見せて、トップカードとボトムカードを取る技法です。取った2枚を先ほどと同じように両手の指先で混ぜてからテーブルに左と右に置き、好きな方を取らせます。残ったカードの上にポケットをのせます。

いまトップから2枚目とボトムにJがあります。トップの2枚を両手の指先で混ぜますが、最後にJ

が上にくるようにします。そして下のカードがトップにそろうようにいったん置き、すぐに右手でボトムトップディールして、2枚のJをテーブルに左と右に置き、好きな方を相手に取らせます。残ったカードはこんどはトップに置きます。

手元のカードを表向きにして、上の2枚を広げて3枚のカードを見せて、「こちらはJではないカードです」と言います。「ということは」と言って、右手で相手を選んだ3枚を表向きにして見せ、「こちらが3枚のJです」とセリフを続けて締めくくります。

*** 備 考 ***

ボトムトップディールするときは、上のカードが半分右にずれた状態にし、右手の指先で右下コーナーをつかみます。そのとき中指はちょうどボトムカードの右下コーナーにあてて、右手を右へ引くときに、トップカードとボトムカードを引いて取り、2枚目はトップに残します。

Part 2 テンカードポーカーディーラー

テンカードポーカーディーラーがマジシャンの間で大流行したのは、1949 年前後でした。その当時の盛り上がり方を感じていただくために、雑誌“フェニックス” No.168 でブルース・エリオットが書いている記事を翻訳文でお読みいただきます。

テンカードポーカーディーラー

=ブルース・エリオット著、雑誌“フェニックス” No.168、1949 年 1 月 14 日 =

この驚くべきポーカートリックでは、デッキから 10 枚のカードを抜き出して、客と 2 人でマンツーマン勝負を行います。何回繰り返しても、つねにマジシャンが勝ちます。マジシャンがシャフルしてからディーラーしてもマジシャンが勝ちます。客がディーラーしてもマジシャンが勝ちます。客がどんなディーラーのやり方をしても、たとえディーラーするカードを取り替えたとしても、いずれにしてもマジシャンが勝つのです。たとえあなたがテクニシャンではなくても、このトリックの根底にある巧妙さゆえに、つねに相手を負かすことができます。

このトリックの歴史をたどれば、メキシコのギャンブラーがバーノンに見せたことから始まります。それはポーカーゲームで 2 人の勝者がした場合、最後にどちらか 1 人が総取りしようと持ちかけられて行われました。ハスラーはロングカードなどをデッキにまぎれ込ませておいて、デッキをシャフルしたのちに 10 枚を抜き出して使います。マジシャンのあなたは何も同じギミックを使う必要はありません。たんにデッキから 3 組のスリーカードを出して使えばよいのです。たとえば、3 枚の 10、3 枚の Q、3 枚の K を使います。10 枚目のカードとして 9 のカードを 1 枚加えます。

10 枚目のカードである 9 のカードは、他のどのスリーカードとマッチしません。これがこのトリックのギミックなのです。こんな小さなギミックでこれだけ強力な結果を導くものは他にありません。

10 枚のカードを好きなだけシャフルします。帽子の中に入れて混ぜてもかまいません。やるべきことは相手に 9 のカードがいくようにすることです。9 のカードを配られた方が必ず負けになります。信じられないなら、いますぐカードを手にして試してみてください。9 の入った方の 5 枚が必ず弱い役となることがわかるでしょう。

つぎは見せ方のポイントです。10 枚のカードをシャフルして 9 のカードをトップからボトムへ、もしくはボトムからトップへコントロールするのは、テクニシャンでなくてもできることです。カードをピークして 9 がどこにあるか見つけたあと、トップに運ぶことは難しいことではありません。初めにトップに置いておいて、トップに保ってシャフルすることもできます。ミルクビドルシャフルを行えば、トップカードは奇数枚目にきます。その他、9 のカードが相手に配られる位置に運ぶ方法は、いくらでもあります。

9のカードをトップにコントロールしたとしましょう。カードを相手から始めて交互にディーリングすれば、当然9は相手の5枚に含まれます。自動的にあなたの5枚が勝利の役となります。奇妙なことに、あなたは配られたカードがなんであるかわからなくても、つねに勝利の役を手をすることになります。たとえば相手の役がツーカードなら、あなたの役はスリーカードとなります。相手がスリーカードなら、あなたはフルハウスになります。以上のようにシャフルしてディーリングして、何回かあなたが勝って見せたあと、9のカードをボトムにコントロールし、カードを相手に渡し、相手にディーリングさせます。ボトムカードは相手の方にいきますから、あなたの勝ちとなります。

こんどは9をトップに維持してシャフルし、最後のシャフルで9の上に1枚加えます。カードを相手に渡して1枚ずつディーリングさせて、9を相手に与えたところで、いくつかの見せ方を採用することができます。たとえば「本物のギャンブラーなら、裏にマークのついたカードを使ったり、2枚目からカードを配るセカンドディーリングを使います。でもこのカードはふつうのカードですし、あなたはセカンドディーリングができないので、カードの表を見て、私に配るかあなたに配るか決めてください」と言って、残りの4枚を自由に配らせます。それでも相手は勝てません。

つぎのような見せ方もあります。9のカードを10枚のボトムに置き、10枚をいったんデッキの上へのせ、10枚を取る振りをして9枚取り、相手にシャフルさせてからトップにのせさせます。これで9のカード、すなわちジョナカード（不運をもたらすカード）が10枚目に加わります。デッキを相手に渡してディーリングさせます。この方法は、あなたがいっさいカードを操作していないように見えますので、たいへん効果的です。

トリックを何回も繰り返したあと、つぎの方法で相手をノックアウトすることが可能です。デッキのトップにAを置いておきます。10枚のボトムに9を置いて、10枚をデッキの上へのせさせます。10枚取る振りをして9枚だけ取り、相手に渡してシャフルさせます。相手がシャフルしている間に、トップから2枚目にあるAをトップに移します。

相手がシャフルした9枚をデッキの上に戻させ、Aを加えて10枚を取ります。10枚をシャフルしてAをトップに運びます。そしてカードを相手に渡し、トップカードを見て、どちらから先に配るか決めさせます。Aはよいカードに見えますから、自分の方から配り始めるでしょう。そのあとどのように配っても、相手は勝てません。

このトリックのバリエーションは無限にあるように思えます。上記のようなアイデアを考えた人それぞれのクレジットを示してはきませんでした。これらはダイ・バーノン、ポール・カーリーから始まり、多くの人に見せて流行させるのに貢献したマーチン・ガードナー、そしてジョン・スカーニヤやオードレイ・ウオッシュュラによって生み出されてきました。

最近まで登場したカードマジックの中で、テンカードディーリングのような存在は珍しいものです。演じるごとに新しい発見があり、経験を積むごとにあなた自身の手順が築かれていくでしょう。さあカードを手にとって、あなたの発見に取り組んでください。

* 備 考 *

エリオットの文章は以上ですが、雑誌“マジック”1994年1月号において、ボブ・ファーマーは、テンカードディールが初めて書物に現れたのは、アーサー・バックレイの“カードコントロール”セカンドエディション(1947年)の中の‘Poker’というトリックだと指摘しています。

エリオットも“フェニックス”のつぎの号No.169(1949年1月28日)で、さらに多数のバージョンを紹介していますので、バックレイが“カードコントロール”でこのトリックを紹介したあと、約2年で多くのバージョンが生まれたこととなります。

アイデア集

‘テンカードポーカーディール’に使う10枚のうち、1枚だけ孤立したカードのことを‘ジョナカード’と呼びますが、ジョナカードの原理について、アーサー・バックレイも説明していると、“マジックペディア”の中で指摘されています。(私はバックレイの初版は持っていますが、第2版は持っていないので、直接確認していません)。

テンカードポーカーディールの核心は、いかにジョナカードを相手に取らせるようにするという点ですから、そのアイデアの部分だけを説明すれば、各バージョンをお伝えできると考えて、アイデア部分を抽出して、年代順に収録いたしました。演じ方の全体を説明した方がよいと思われるものについては、このあと収録いたしました。

ローレンセット (ハリー・ローレン、デックスターリティ、1967年)

ジョナカードの存在がもっとも目立たない組合せを、ローレンが研究して“デックスターリティ”に書きましたが、多くのマジシャンがその組合せが有効であると認めています。その組み合わせをボブ・ファーマーはローレンセットと名付けました。以下の10枚がローレンセットの組み合わせです。

5C、5S、5H、KC、KS、KH、AC、AH、AD、QC(ジョナカード)。

私はこれがジョナカードが目立たない組合せであるとは思えません。3枚の同じ数のカード3組と、1枚だけ違う数の組み合わせならばよいのですから、もっと似たようなカードを使った方がよいと思います。多くのマジシャンが認めているというので、いちおう紹介しておきました。

TEN CARD DEAL P.S. (マーチン・ガードナー、雑誌“フェニックス” No.170、1949年2月11日)

クラシックフォースの得意な人にとって、ガードナーのアイデアは秀逸に感じるでしょう。カードを広げて「5枚のカードを選んでください」と言います。フォースするチャンスが5回あるのですから、5回とも失敗することはまずあり得ません。

TEN CARD DEAL P.S. (エドワード・マルロー、雑誌“フェニックス” No.170、1949年2月11日)

ジョナカードにドットをつけておくかクリンプしておき、シャフルさせたカードを広げながら「私が勝ち続けたので、こんどはあなたが勝つ方がいいか、それとも私が勝つ方がいいですか」とたずね、相手の返事とジョナカードが奇数枚目にあるか偶数枚目にあるかによって、マジシャンがディールするか相手にディールさせて行います。

TEN CARD DEAL P.S. (バート・アラートン、雑誌“フェニックス” No.170、1949年2月11日)

初めの1枚ずつは裏向きにディールしますが、相手にジョナカードを配ります。「こんどはスタッドポーカーのやり方でやりましょう。あとの4枚は表向きに配ります。好きなカードを4枚抜いてください」と言って、相手が抜いた4枚を表向きに裏向きの1枚の上にせさせます。その4枚のカードを見ると相手の役がわかり、あなたの方の役はそれよりひとつランクが上ですから、自分のカードを見ないで自分の手を宣言することができます。

アラートンのもうひとつのやり方は、デッキのボトムに10枚を置き、ボトムから2枚目をジョナカードとします。デッキを表向きにビドルポジションに持ち、10枚のカードを左手に取っていくとき、2枚目でジョナカードをデッキの下にスチールします。9枚を相手に渡してシャフルさせ、裏向きにしたデッキの上にシャフルされた9枚を裏向きにのせさせます。デッキを相手に渡し、ディールさせます。

スーパーショーダウン (ダイ・バーノン、“インナーシークレツオブカードマジック”、1959年)

ジョナカードにドットをつけておき、相手に混ぜさせたカードをテーブルにスプレッドし、ジョナカードが偶数枚目にあればそのまま、奇数枚目にあればトップカードで他のカードをスクープして取ることによって、ジョナカードの位置をずらします。そして相手にディールさせます。

ディーンズポーカーディール (ディーン、“スカーニオンカードトリックス”、1950年)

ジョン・スカーニはディーンのアイディアとしてつぎのように書いています。デッキのトップから4つの異なる組み合わせをセットしておけば、一回使ったカードはボトムに入れ、つぎの4枚をつぎのディールで使えば、ジョナカードの存在を気づかれることはありません。

テイクテン (ジョン・マレイ、雑誌“フェニックス” No.180、1949年6月24日)

このジョン・マレイの方法は、テンカードディールの最後に行うのに適しています。カードがぎりぎりに入る大きさの封筒を10枚用意します。そのうちのひとつに識別できる小さなマークをつけます。

10枚のカードを相手にシャフルさせてから、カードを封筒に封筒に入れますが、ジョナカードをマークのついた封筒に入れます。封筒は封印せずに、ただフラップを折るだけにします。

相手に5つの封筒を取らせませんが、マレイはフォースを使うと言っています。いずれにしても、いまままで解説されてきた方法のどれかによって、マークされた封筒を取らせませす。封筒の中からカードを出して、結果を見せませす。

ダンディール1（ボブ・ファーマー、雑誌“マジック”、1994年2月）

この方法はテンカードディールの導入部に最適の方法です。ローレンセットをトップにセットさせませす。ジョナカードがトップから10枚目です。

デッキをフォールスシャフルしたのち、表向きにテーブルにスプレッドし、後ろを向させませす。相手に好きなカードを1枚取り、裏向きに持たさせませす。

前に向き直り、カードをそろえて背後に運びませす。トップカードを前に出してあなたのカードとして置させませす。カードをフォールスシャフルしてから相手に渡させませす。相手にあと4枚ずつディールさせませす。お互いのカードを見せ合うと、相手の負けとなります。

相手が取るカードは、ジョナカード、ローレンセットの中のジョナカード以外の1枚、ローレンセット以外のカード、以上のどれかです。どのカードが相手に取られても、必ずうまくいきます。

シンプルディール（加藤英夫、2013年9月10日）

マルローのアイデアでは、ドットがつけられたジョナカードが奇数枚目であればマジシャンがディールし、偶数枚目であれば相手にディールさせませす。これはポーカーにおけるディールが、つねに相手から先にディールすることを知っているアメリカ人には有効かもしれませんが、ほとんどの人がそれを知らない日本人相手には、もっと簡単に対処できます。

相手がシャフルしたカードを受け取り、表を相手に向けて両手の間に広げ、「カードはよく混ざっています。これをあなたと私に配ります」と言させませすが、ジョナカードが奇数枚目のある場合は「あなたと私に配ります」と言させませ、偶数枚目にある場合は「私とあなたに配ります」と言させませ。

そしてジョナカードが奇数枚目にある場合は相手から先にディールをスタートし、偶数枚目にある場合には、マジシャンから先にディールをスタートさせませす。

テイクイーザー（加藤英夫、2004年6月29日）

これは日付が前後させませますが、前述の‘シンプルディール’に続けて使うと有効なやり方です。やはりジョナカードの裏面にドットがつけられている場合のやり方です。

「こんどはあなたに配っていただきませす」と言させませ、10枚を相手に渡させませす。よくシャフルさせませ

たあと、左右交互に2組にディーラーさせます。ジョナカードがどちらにいったかを見えています。

左手で2組のパイルを交互にさし示し、さし示した2組目の前で左手を静止させて、「どちらか取っていただけますか」と言います。このセリフはたいへん重要です。「どちらかを取ってください」ではだめです。

相手がジョナカードのない方を取ったら、「有り難うございます」と言って、その組を左手に受け取ります。相手に残りの組を取らせません。これで勝負します。

相手がジョナカードのある方を取ったら、「では残りの組を私が取ります」と言って、残りの組をあなたが取ります。これで勝負します。

「どちらか取っていただけますか」というセリフとともに左手をさし出したのが、あなたのために取ってもらうということと、相手のために取ってもらうという、どちらの意味にも感じられることがミソです。

サイダー

= ポール・カリー、"ポール・カリープレゼンツ"、1974年 =

* 準備 *

スリーカードを3組と、それらと違う数のカード2枚を使います。スリーカード以外の2枚は違う数でなければなりません。スリーカード3組の9枚をよく混ぜます。デッキのトップから、スリーカード3組のうちの8枚、スリーカードでないカード2枚、スリーカードのうちの残りの1枚とセットします。

* 方法 *

「これから10枚のカードを使って、一対一のポーカー勝負を行います」と言って、トップから順番が変わらないように10枚数え取り、そろえつつ下のもう1枚を加えて取ります。

相手にカードを渡し、トップから2枚のカードをテーブルに並べて置かせ、そのうちの好きな方の1枚を相手の方に引かせ、残りの1枚は手元のカードのボトムに入れさせます。つぎの2枚をテーブルに置かせ、同様に好きな方を取らせ、残りをボトムに入れさせます。これをあと3回行わせると、相手の前に5枚のカードのパイルがてきます。

「あなたと私のカードが区別できるように、残っているカードをこちらの1組の上ののせてください」と言って、残りのカードをデッキの上ののせさせます。相手の5枚を表向きにさせます。相手の役を見れば自分の役がわかりますから、「あなたがツープペアなら私はスリーカードで勝てますね」と言って、デッキから5枚のカードを表向きにテーブルに置きます。それはあなたが言った通りの役です。

シンシナティキッド

＝トニー・ビナレリ、“クラスアクト”、1993年＝

テンカードディールは、アーサー・バックレイの本に取り上げられたときは、ひとつのパズルとしての扱いでした。そしてその他の方法でも、パズル的な現象である印象がついてまわりました。しかしこのビナレリの方法をもって、テンカードディールはプロフェッショナルなマジックのアクトとして、十分にレパトリーになり得るものに完成されました。

* 準備 *

スリーカードのセットを2組作ります。たとえば一方は5、10、Qを各3枚ずつ、他方は2、7、Jを各3枚ずつとします。前者をポケットA、後者をポケットBと呼びます。演出として多くの紙幣を用意します。

* 方法 *

Aポケットを1人目の客に渡し、Bポケットを2人目の客に渡し、それぞれよくシャフルさせます。それぞれのポケットを左右の手に受け取り、一人目の客にどちらのポケットを上にするか選択させ、それを上にのせて重ねます。このようにすると自動的にトップから10枚目のカードがジョナカードになります。

1人目の客にカードを渡し、マジシャン側からカードを置かせ、1枚ずつ裏向きに置いたら、つぎから表向きに置かすように指示します。2枚目を置いたら、お互いにカードを見て、あなたは「あなたの分まで私が出しましょう。あなたが勝ったらさしあげます」と言って、2枚の紙幣をかけます。

さらにカードを置かせるたびに、カードを見て賭金を増やしていきます。5枚ずつ配り終えたら「よかったらカードを1枚交換していいですよ」と言います。そしてカードを表向きにして、マジシャンの勝ちであることを見せ、賭金を取ります。

10枚の中からジョナカード役割をしたカードを見つけ、カードを集めるときにボトムに置きます。「もういちど混ぜてください」と言いながら、ジョナカードの役割をしたカードを使われなかった8枚のカードの上に落とし、それぞれの客に9枚ずつ渡し、シャフルさせます。こんどもどちらを上にするか客の指示どおりにのせ、カードを相手に渡します。

まえと同じように1枚目は裏向きに置かせ、そのあと表向きに1枚ずつ置かれるたびに、相手にカードを取り替えてもいいことを言います。そして賭金を増やしていきます。そして4枚ずつ配った段階では「なんだったら全部取り替えてもいいですよ」と言います。途中でどのようにカードが配られようとも、最後にジョナカードが相手に配られるので、マジシャンはけて負けません。結果を見せ、賭金を取ってポケットに入れます。

* 備 考 *

2 段階しかないのがさみしいような気がしますが、けしてビナレリがときどき行うと述べている第 3 段を行うのはおすすめしません。

彼は第 3 段で自分のカードをロイヤルフラッシュにすり替えて見せるのです。クライマックスとしてそれをやりたい気持ちは理解できないことはありません。しかしながら、このトリックのように、原理的もしくは心理的な巧妙さで成立しているマジックのあとに、手練で行うマジックで結末をつけるのはよくありません。カードを変化させることができるのなら、それまで行われてきた現象は、できるのが当たり前に感じられてしまうでしょう。

もしももう 1 段加えたいとしたら、最初にマジシャンがシャフルしてディーリングを加えるとよいでしょう。そうすればつぎに客がシャフルすることが生きてくるからです。このマジックが繰り返す回数が少なくても効果が強いのは、現金をかけて、マジシャンが負けたら賭金をあげると言っていることです。このことが重要な働きをしていることを見逃してはなりません。

表向きのテンカードポーカードディーリング

= 加藤英夫、“研究ノート”、1997 年 12 月 28 日 =

‘テンカードポーカードディーリング’で 18 枚のカードを使うことを最初に考えたのは、ニック・トロストです。そのトロスト自身も、ビナレリのバリエーションを高く評価しています。私の方法は 3 回繰り返しますが、最後の部分だけ私のアイデアによるもので、1 回目と 2 回目はビナレリのやり方を踏襲しています。演技についてはまったく書きません。ビナレリの演出を借用して演じてください。

* 方 法 *

ビナレリのやり方で 2 回目まで行います。手に残っている 8 枚を相手に渡してシャフルさせ、あなたはディーリングされた 10 枚をシャフルしますが、2 回目にジョナカードの役をはたしたカードがトップにくるようにします。そして相手のカードを受け取り、あなたのポケットをその上に重ねます。現在のカードの状態は、1、9、8となっています。すなわち、トップの 1 枚とボトムの 8 枚がひとつのグループの 9 枚です。

「最後はカードを表向きにして、あなたに好きな方を取っていただきます。あなたはまったく自由にカードを選べるのです」と言って、トップとの 2 枚を表向きに置き、好きな方を相手に取らせませす。相手がトップカードだった方を取ったら、そのあとカードを裏向きに持ったまま、上から 2 枚ずつ取って表向きに置き、好きな方を取らせませす。もしも相手がトップから 2 枚目だった方を 1 目目に選んだら、カード全体を表向きにして、フェースから 2 枚ずつカードを置いて、好きな方を相手に取らせていきます。まったく自由に選んだように見えますが、やはりマジシャンの勝ちとなります。

*** 備 考 ***

いままでの 'テンカードポーカーディール' では、ジョナカードをフォースしますが、この方法では、初めに選んだカードによって、残りの 4 枚をフォースしていることとなります。

ショーダウン

= ニック・トロスト、"カードマジックオブニック・トロスト"、1997 年 =

この作品は、1974 年に発売されたものですが、1997 年に "カードマジックオブニック・トロスト" に収録されました。ニセのインデックスを持つトリックカードを使うやりかたです。

*** 準 備 ***

ハートの 8 の一方のインデックスがハートの 7 になっているカードと、スペードの 8 の一方のインデックスがスペードの 7 になっているカードを使います。これらのカードの裏面には、7 のインデックスがある方のコーナーに、鉛筆で小さなドットを打っておきます。デッキからクラブの 8、ダイヤの 8、それに J を 3 枚と 5 のカードを 3 枚抜き出して使います。ドットつきの 2 枚を 10 枚のトップにセットします。他の 8 枚は適当に混ざった状態にします。

*** 方 法 ***

カードを表向きに広げて見せます。そしてシャフルしますが、ドットカードを結果的にボトムに運びます。

第 1 段

カードを 2 つのパイルにディールします。相手にどちらかのパイルを選ばせて、選ばれたパイルを横方向に表向きに返して広げます。そしてそれらのポーカーにおける役を指摘します。そしてそれらを横方向に返して裏向きにして、シャフルしてダブルエンダーカードをボトムに運び、この 5 枚をテーブルに置きます。あなたの 5 枚を取り、縦方向に返して表向きに広げ、あなたの勝ちであることを見せます。

あなたの 5 枚を縦方向に返して裏向きにして、相手の 5 枚の上に乗せます。カードをシャフルしますが、最初にトップとボトムの 2 枚をいっしょに取ってオーバーハンドシャフルを行います。これで 2 枚のドットつきカードはボトムにコントロールされます。

第 2 段

1 段目と同じことをやりますが、そのあと 2 枚のドットカードがトップにくるようにシャフルします。

第3段

最後はスタッドポーカーのやり方でカードを配ると宣言し、1枚目を裏向きにディーラーし、あとの4枚は表向きにディーラーします。相手に4つの選択の機会を与えると、まずどちらのパイルがいいか、コインなどのマーカーを置かせます。つぎに表向きのカード同士を何枚か交換してもよいと言います。つぎに裏向きのカードを交換したいかどうかききます。ここで、表向きのカードを裏向きにして、裏向きの1枚の下にすべり込ませます。最後の選択は、5枚全体を交換したいかどうか、とききます。いずれの選択についても、相手の希望どおりに行います。

相手のカードを横向きに返して7のカードが出るように広げます。あなたのカードを縦方向に返して表向きにし、やはりあなたの勝ちであることを見せます。

* 備考 *

トム・ハーバードのアイデアです。一方のドットカードを逆向きにしておきます。そして2人に配ったあと、どちらも同じ方向に返して、相手の方が負け、マジシャンが勝ちとなるように返して見せるのです。両方とも横方向に返すか、縦方向に返すかのどちらかになるわけです。

レネ・レバンの“マジックフロムザソウル”に解説されている、'Mahtub'というテンカードポーカーディーラーでも2枚のダブルエンダーカードが使われていますが、トロストの組合せではなく、クラブの8/クラブの7、スペードの8/スペードの7の組合せとなっています。

レバンのようなダブルエンダーの方が、スペードの8が現れるときはクラブの7が現れ、スペードの7が現れるときはクラブの8が現れることになり、それら2枚がスードペアの関係となり、すり替えが目立ちにくくなります。トロストのこの作品に対しても、レバンのダブルエンダーを使うべきです。

* 追記 * (2013年9月10日)

'ショーダウン'に対する、私のひとつのアイデアです。原案のどれかの部分と差し替えてもいいですし、加えることもできます。

10枚のカードをテーブルに分散させて置き、相手とマジシャンが交互に1枚ずつ取っていきます。相手に先に取らせます。マジシャンは、相手がドットのついたダブルエンダーを取ったとき、つぎにもう1枚のダブルエンダーを取ります。相手がドットのついていないカードを取ったら、つぎにドットのついていないカードを取ります。

この法則で最後まで取っていけば、相手とマジシャンにダブルエンダーが1枚ずつとなり、原案の見せ方でマジシャンが勝ったことを見せられます。

Part 3 スードデモンストレーション

ボトムディールやセンターディールやセカンドディールなど、ギャンブラーのテクニックを教え
ると言って話を進めて、結局は不思議な現象を見せるというタイプのトリックです。偽りのデ
モンストレーションという意味で、'スードデモンストレーション'という名称で呼ばれているジャ
ンルです。

ポーカーパズル

= 作者不詳、ロイヤルロードトゥーカーマジック、1948年 =

* 方法 *

「ギャンブラーとが強い手を配るテクニックをお見せしましょう。もちろん強い手を配るには、カード
をあらかじめ特定の位置に用意しておきます」と言って、カードを広げ、4枚のKをフェースに集
めつつ、4枚のAをトップにカルします。

ボトムの4枚のKを見せ、「4枚のKがあればとても強い手になります。ギャンブラーは4枚のKを
いちばん下に置いておきます」と言って、デッキを裏向きにディーリングポジションに持ちます。

「5人のプレーヤーに配るとしたら、自分に配るとき、いちばん下からカードを取るのです」と説明
して、ディールをスタートします。そして自分のところではっきりわかるようにボトムからディールし
ます。そのように4枚のKを自分にディールしたあと、5枚目はフェアにトップからディールします。
そして自分に配られたKのフォーカードを見せます。

他の4人の手をでたらめな順で重ね、デッキのトップに置きます。最後に自分の5枚をトップに置
きます。そしてここでトップの25枚を乱さないフォールスシャフルを行います。

「いまやったのはあくまでもギャンブラーのやり方です。私はマジシャンですから、マジシャンのや
り方で配ります」と言って、5人に対してまた5枚ずつディールしますが、こんどはボトムディール
を行いません。

「何か怪しいことをやったように見えますか、見えませんね。それでも4枚のKを自分に配ることが
できるんです」と言って、自分に配られた5枚を取り、そのパケットを表向きにしてフェースカード
を見せます。それはKです。「ほらKですね。つぎもKです」と言うとき、フェースカードを広げて
つぎのカード見せます。それはAです。Kではないので少し驚いた表情を見せます。

「心配しないでください。私はもっと強い手を配ることができるのです」と言って、残りのカードを広
げて、Aのフォーカードであることを見せます。

* 備 考 *

私が考えた演出的バリエーションを付記いたします。

1 回目で自分に 4 枚のKを集めたのを見せたあと、「このように自分に強い手を配るだけでなく、ギャンブラーはわざと他のプレイヤーに強い手を配ることもあるんです。その例をお見せしましょう」と言って、原案とは違うカードの集め方をします。他の 4 組は集めてトップに置き、自分に配られた 5 枚はボトムに置きます。

「5 人でプレイしているとして、ギャンブラーから 2 人目に、いままで勝ち続けて大金を稼いでいるプレイヤーがいるとします」と言って、ディールを開始し、2 人目でボトムディールを行います。他はフェアなディールを行います。その結果、2 人目のプレイヤーに 4 枚のK、自分に 4 枚のAが配られることになります。

2 人目の手を表向きにして、「なぜギャンブラーは彼に強い手を配ったのでしょうか。それは大金を賭けさせるためでした。じつは自分にはもっと強い手を配ったのです」と言って、4 枚のAの入った自分のカードを表向きにします。

サプライズドギャンブラー

= マーチン・ガードナー、“カットザカード”、1942 年 =

1948 年発行の“ロイヤルロードトゥーカードマジック”に‘ポーカーパズル’が解説される 6 年まえに類似のトリックが存在していたのを、今回の調査で見つけました。構造は似ていますが、演出が異なりますので収録いたしました。

* 方 法 *

このマジックを演ずるまえに、4 枚のAをトップにセットします。4 枚のAのマジックを演じたあとに続ければ、セットの必要がありません。

「ギャンブラーの間では、昔はボトムディールというのが使われていました。どのようなものかお見せしましょう」と言って、カードを広げて 4 枚のKを抜き出し、よく見せてからボトムに置きます。5 人に対して 5 枚ずつのポーカーの手を配ります。自分は最後にディールしますが、ボトムディールします。このボトムディールは下手くそでかまいません。そして自分の手を見せて「このようにギャンブラーは自分に対してはいちばん下、すなわちボトムからカードを取るのです」と言います。

他の 4 人にディールしたパケットをデッキのトップに集めます。そしてあなたの手の中から、Kでないカードを取ってトップにのせます。「ところがボトムディールは最近ではすたっしてしまい、最近のギャンブラーはKをいちばん上に置きます」と言って、4 枚のKをトップに置きます。ここでフォー

ルスシャフルやフォールスカットを行います。

もういちど5人に対して5枚ずつディールしますが、観客にどんなテクニックが使われるかよく見ていてくれ、と指示してからやります。そして自分に配られたカードをそろえたまま表向きにし、ボトムにKがないので驚いた顔をします。それを取ってつぎのカードを見るとAなのでなおさら驚きます。「心配しないでください。最近のテクニックは、もっと強力な手を配ることができるんです」と言って、4枚のAを見せます。

フロムザセラー

= ダーウィン・オルティズ、“カードシャーク”、1995年 =

* 方法 *

このマジックを演ずるまえに、ボトムディールについて説明しておく必要があります。「これからボトムディールの使い方を見せましょう」と言いながら、4枚のAを抜き出して表向きにテーブルに置きますが、その動作の中で2枚の同色同数のカードをフェースから1枚目と3枚目に置きます。4枚のAをデッキの上でそろえるとき、下に2枚のカードを加えます。そしてデッキを表向きにテーブルに置きます。

6枚のうちのいちばん下のカードの上に右親指でブレークを保持します。そして1枚目のAを左親指で引いて取り、2枚目のAを取り、3枚目のAを取るとき、その下にブレークの下の1枚を置いてきます。その下に左小指でブレークを作ります。右手には2枚のカードが残っています。その下に左手のブレーク上の2枚を少し左にずらして取り、残りの2枚のAを左手でずらし、4枚が少しずつずれた状態にします。

いま図1の状態になっています。上から1枚目のAと2枚目のAの下に余分なカードが隠れています。



4枚のAを図2のようにデッキの上に置き、両手ではっきりとAをそろえます。そしてデッキを取り上げて裏向にして左手に持ち、「4枚のAは1組のいちばん下にあります」と言います。



4人にカードをディールしますが、3人目でボトムディールをします。これは上手なボトムディールです。そして4人目の自分のときに下手なボトムディールをします。2ラウンド目も同様に、3人目で上手なボトムディール、4人目で下手なボトムディールを行います。3ラウンド目は3人目で上手になボトムディールを行ったあと、「1枚は本当に上から取ります。Aは4枚配ればよいのですから」と言って、トップからカードを取って自分にディールします。

4ラウンド目と5ラウンド目は、1ラウンド目に行ったのと同様に、3人目で上手なボトムディール、4人目で下手なボトムディールを行います。これで3人目に4枚のAが配られました。

「ときによっては、ボトムディールに気づく人がいることがあります。そのようなとき、賢明なギャンブラーは、けして自分に良いカードを配ったりはしません」と言って、自分のカードを表向きにします。「そのようなときは自分のパートナーに良いカードを配ります」と言って、3人目のカードを表向きにします。そして「ゲームが終わったあとで儲けを山分けすればよいのです」と言って終わります。

ボトムディール・デモンストレーション

= 加藤英夫、“研究ノート”、1998年3月13日 =

* 方 法 *

「これからギャンブラーのテクニックを説明しますが、4枚のAを自分に配ることにします。このテクニックはボトムディールと呼ばれる、いちばん下にあるカードを取って自分に配るというテクニックです」と言って、デッキから4枚のAを抜き出して、表向きにテーブルに置きます。

「わかりやすいように少ないカードでやりましょう」と言って、トップから数えながら右手に12枚のカードを取りますが、6枚目と7枚目の間がわかるように人さし指のつけ根を間にあてます。残りのデッキをテーブルに置き、右手の12枚をそろえるときに6枚目の下にブレイクを作ります。右手で4枚のAを取り上げて左手のカードの上へのせ、広げてAを見せます。そしてそろえてブレイクの上の10枚を右手にビドルポジションに持ちますが、4枚のAとその下の裏向きのカードの間に右親指でブレイクを保持します。

2枚のAを裏返したら、ブレイクの下のカードをその上にドロップします。そしてあと2枚のAを裏返します。上から4枚のカードを広げて右手に持ち、「4枚のAをいちばん下に置きます」と言って、4枚をそろえる振りをして下の3枚をトップにドロップし、上の1枚だけをいかにも4枚のごとく持ってボトムに入れます。

4人にカードをディールしますが、セカンドディールを続け、3枚置いたところで手を止め、「つぎにボトムディールします」と言って、つぎのカードをふつうにトップからディールします。「下から取ったのがわかりましたか」と言います。つぎはふつうに3人にディールして、つぎのカードを自分にディールします。つぎはセカンドディールを続け、自分にAをディールします。3枚ずつ配ったとこ

ろで手を止めて、「最後は下から取ったのがよくわかりますよ」と言って、ふつうにディーリングします。最後のカードを自分に置くとき、「ほら、下のカードを取りました」と言います。

他の3人分のカードを表向きにしたあと、自分に配られた4枚を表向きにして見せます。

フェイスアップセンターズ

= ミルト・コート & ダーウィン・オルティズ、"カードシャーク"、1995年 =

ミルト・コートの'ジスイズセンターズ'の一部分をダーウィン・オルティズが改案したものです。

* 方法 *

「これからギャンブラーのテクニクである、センターディーリングをお見せします。これはいかにもカードを上から取ったように見せて、1組の中から取ってしまうというもので、ギャンブラーのテクニクでももっとも難しいものと言われていました」と説明を始め、デッキから4枚のAを抜き出してテーブルに表向きに置きます。残りのカードはそろえて裏向きに持ちます。

「Aがわかりやすいように、表向きに1組の中に入れます」と言って、4枚のAを表向きにデッキのトップに置き、リフルシャフルを行い、4枚のAの上に2枚の裏向きのカードをリフルしてのせます。そしてスリップカットを行います。Aは2、3、4、5枚目にきます。このあとアウトのファローシャフルを2回行います。このファローシャフルは正確なアウトファローではなく、上半分を少なく取り、下半分の下の方にファローし、押し込むときに下半分のトップカードの上にブレイクを作り、ブレイクからカットします。これを2回行います。

Aは、5、9、13、17枚目にきています。ピンキーカウントで5枚目の下にブレイクを作ります。トップからカードを広げていき、4枚目でダブルプッシュし、そのあと3枚広げます。「上の方にAはありません」と言います。カードを閉じ、デッキを立てて表を相手に向けてボトムの7、8枚を広げて、「下にもAはありません」と言います。デッキの中央部分を少し広げ、上の方に向かってゆっくり広げていき、4枚のうちのいちばん下のAが現れるまで広げます。そのAの上の3枚まで広げ、「まん中へんに1枚あります」と言います。そしてカードを閉じます。

「さて、4人にカードを配りますが、自分のところにAを配りますのでよく見ていてください」と言います。そして3人にはふつうに配り、4人目の自分のときにセカンドディーリングして表向きのAを配ります。これを4枚のAが配られるまで行います。

Part 4 ポーカーディーラー

ギャンブルトリックのメインプロットは、ポーカーディーラーです。テンカードポーカーディーラーもポーカーディーラーに似てはいますが、デッキからディーラーするのではない、という観点から別のジャンルと区分けいたしました。

そしてポーカーディーラーの極めつけは、ダイ・バーノンのこの作品です。いきなり極めつけから解説いたします。

ポーカーデモンストレーション

= ダイ・バーノン、“ダイ・バーノンブックオブマジック”、1957年 =

このトリックが“ダイ・バーノンブックオブマジック”に収録されたのには、たいへん面白い経緯があります。ルイス・ギャンソンの解説からその経緯の部分を翻訳しておきます。

このバーノンの‘ポーカーデモンストレーション’を当書に収録するにあたっては、雑誌“ニューフェニックス”からの引用許可をいただいた、同誌の編集者、ジェイ・マーシャル氏のご厚意に感謝いたします。

この傑作が雑誌“ニューフェニックス”に掲載されることとなったのは、チェスの勝負の結果によるものでした。シカゴで1954年にバーノンがレクチャーを行ったとき、このトリックを見たマーシャルがバーノンに掲載許可を求めました。バーノンは公表するのをためらいました。そこでマーシャルはバーノンにチェスの勝負を持ちかけ、それを受けたバーノンはチェスの勝負に負けて、掲載許可を与えることになったのです。

* 準備 *

まず4枚のAを抜き出してわきに置いてください。残りのカードから27枚のカードをつぎの順にセットしてください。スペードの8がトップです。

8S、3C、5S、5H、4D、9H、10H、2H、9C、10S、4H、10C、2C、4C、JS、7H、QC、2D、JD、QS、3H、QD、2S、JC、KS、KH、QH。

そしてセットした27枚の上に残りの21枚のカードを重ねますが、それら21枚の順は適当でかまいません。

以上のようにセットした48枚の中に、抜き出してある4枚のAを分散させて入れます。セットした27枚の中に入れてもかまいません。そしてデッキをケースに入れます。

* 方 法 *

「ギャンブラーにおいてスタッキングというのは、カードをあらかじめ都合のよい順に配列させることです。そのことを聞いたことがある人もかなりいると思いますが、そのやり方を知っている人は少ないと思います」と話をしてから、デッキをケースから取り出します。

デッキを表向きに広げて、4枚のAを抜き出して表向きにテーブルに置きますが、セットした27枚の順を狂わせないようにやります。

デッキを裏返して、密かにボトムのハートのQをクリンプします。「古くからあるヘイモウシャフルというやり方でカードを混ぜます」と言って、まずトップの4枚を1枚ずつシャフルしてボトムに置きます。これはカードをスタックするのを説明する中でやるのですから、1枚ずつ取ったのがはっきりわかるようにやります。

「たいていギャンブラーは強い3枚のカードが3枚あれば十分です」と言って、3枚のAをトップに置きます。「もしも4枚目も必要な場合は、4枚目をいちばん下に置きます」と言って、4枚目のAをボトムに置きます。

「ギャンブラーはプレイヤーの人数の2倍プラス1枚のカードを数え取ります。プレイヤーが5人なら、5の2倍は10ですから、11枚のカードを取ります」と言って、11枚のカードを1枚ずつ左手に取り取ります。

「とても簡単でしょう」と言って、その11枚をトップに戻します。

「つぎにプレイヤーの人数より1枚少ない枚数を取ります。5人なら4枚取ります」と言って、4枚のカードを1枚ずつ左手に取り、その上に残りのデッキを置きます。

「つぎに人数と同じ枚数を取ります」と言って、5枚取って残りをその上に置きます。

「そして1枚をまわしたあと、また人数分まわします」と言って、1枚取ってボトムに置いたあと、人数分の5枚を取ってボトムに置きます。

「ギャンブラーというのは、つねに秘密のパートナーをプレイヤーの中に潜ませているものです。そしてそのパートナーにしかるべき位置でカットさせます」と言って、クリンプされたハートのQがボトムにいくようにカットします。

「いよいよカードが5人に配られます」と言って、通常のポーカーのやり方で5人分に配りますが、5人目としてマジシャンの前に置くときは、つねに表向きにして置きます。その結果、マジシャンには4枚のAと他の1枚が配られます。

「ほら、ギャンブラーにはAのフォーカードが配られました」と言います。それから他の4人に配られたカードがどんな手になっているかを見せながら、適当なことを言います。たとえばつぎのようなことを言えばよいでしょう。

「他のプレイヤーの手がたいしたことのないのに、4枚のAを自分に配る必要はありません」。もしも4人の中に強い手があったら、「これはかなり強い手ですから、このプレイヤーは強気にプレイするでしょう」などなど。

現在テーブルには25枚のカードが広がっていて、残りの27枚はわきに置かれています。25枚のうち、4枚のAをいったんわきに置き、他の21枚を集めて裏向きにして、その上にスペードのAをのせ、そしてその上にあと3枚のAをのせます。そしてそれらの上にわきに置いてあるセットされた27枚のカードを重ねます。

現在デッキの状態は、トップ27枚がセットされたときのまま、その下に3枚のA、つぎがスペードのA、残りの21枚となっています。

この状態では、表を左に向けてオーバーハンドシャフルすれば、ボトムの21枚の部分でシャフルすることができます。

「もういちどカードを配りますが、こんどはギャンブラーのカードは裏向きのまま配ります」と言うから、5人に5枚ずつ配ります。すべて裏向きにです。

「今回は自分に強い手を配るだけでなく、他のプレイヤーにどんなカードが配られるかを当てます。1人目は1枚のカード以外はハートのフラッシュです」と言って、1人目のカードを取り、表向きに広げて見せ、そのままテーブルに置きます。ハートのカード4枚とスペードの8です。

「2人目はセーフティレイザーと呼ばれるツーペアです。セーフティレイザーと呼ばれるのは、ツーペアあればたいいレイズしてもよい手だからです」と言って、2人目のカードを取り、表向きに広げて見せ、そのままテーブルに置きます。Qと10のツーペアです。

「3人目は2のフォーオブアカインドです。これはエーセズワイルドというゲームでは強力な手です」と言って、3人目のカードを取り、表向きに広げて見せ、そのままテーブルに置きます。2のフォーカードです。

「4人目の手は、悪い手ばかりがくるプレイヤーが降りるのをためらうワンペアです」と言って、4人目のカードを取り、表向きに広げて見せ、そのままテーブルに置きます。

「さてギャンブラーはどんな手になったでしょうか」と言って、最後の5枚を取り上げて、広げて見せることはしないで、ちらっとボトムのダイヤの4を見せてから、裏向きにテーブルに戻します。

「いまプレイしているのはドローポーカーですから、自分の5枚から何枚か捨てて、その分を残りのカードから取ります。1人目はスペードの8を取り替えるに違いありません」と言って、スペードの8を捨てて、残りのカードのトップから1枚取って表向きにして4枚の上へのせ、「ハートのフラッシュになりました」と言います。

「2人目はツーペアですから、クラブの3を捨てて1枚取ります」と言って、クラブの3を捨てて、残りのカードから1枚取って表向きにして4枚の上へのせ、「Qと10のフルハウスになりました」と言います。

「フォーカードの3人目のプレイヤーは取り替える必要がありません」と言います。

「さて、降りるのをためらった4人目プレイヤーは、2枚のJを残して他の3枚を取り替えました」と言って、ハートの5、クラブの9、クラブの4を捨てて、残りのカードから3枚取って表向きに広げ、AとJのフルハウスになったのを見せます。

ディーラーの5枚を取り、表を自分に向けて広げ、ダイヤの4を捨てて、残りのカードから右手に1枚取り、表を見ます。4人目のプレイヤーのカードをさし示し、「このプレイヤーは3枚ではなく、4枚取り替えるべきでした。そうしたらAのフォーカードになりましたから」と言って、右手のスペードのAを表向きに、4人目のカードに添えて見せます。

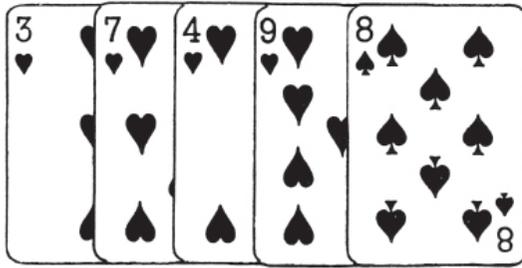
「でもスペードのAはディーラーにきてしまいました。その結果、ディーラーには、スペードの10、J、Q、K、Aと、ロイヤルフラッシュとなりました」と言いますが、名前を言いながらそのカードを表向きに置いていきます。

* 備 考 *

原著の準備の解説の冒頭では、次ページの図1のようなチャートを示しています。方法を読むまえにこのチャートにもとづいてセットのやり方を理解するのはたいへんなので、私の上記の解説では、セットする27枚の順を示しました。

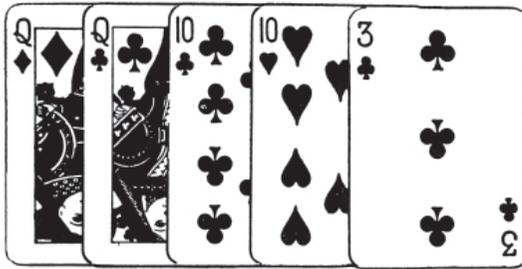
方法を理解したあとは、原著のチャートを見ることによって、セットの法則を確認することができ、メモを見ないでもセットすることも可能です。このチャートの左側に、5枚ずつ5組が並んでいて、上からつぎのような組み合わせになっています。

1. ハートのフラッシュの4枚＋スペードの8
2. Qと10のツーペア＋クラブの3
3. 2のフォーカード＋スペードの5
4. Jのワンペアと3枚のバラバラのカード
5. A以外のスペードのロイヤルフラッシュ4枚＋ダイヤの4



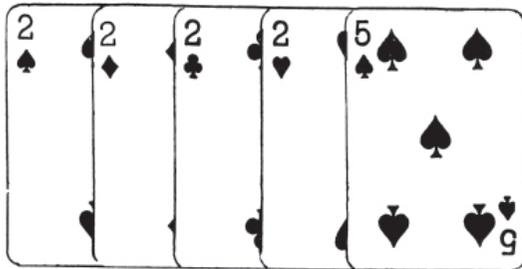
1

1st hand discards the 8 of spades and draws king of hearts to make a flush.



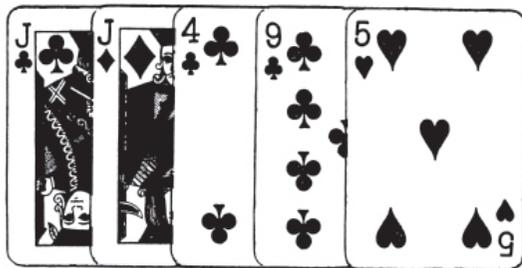
2

2nd hand discards the three of clubs and draws queen of hearts to make a full house.



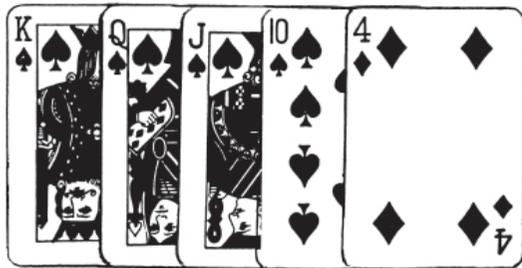
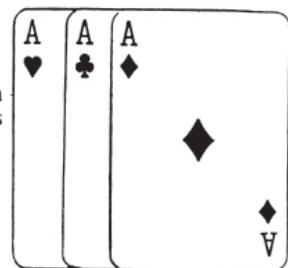
3

3rd hand can stand pat or if one is drawn deal a bottom - or slip one to top and deal.



4

4th hand holds a pair and draws three aces to make a full house.



5

5th (dealers) hand discards the four of diamonds and draws the ace of spades to make a royal flush.



1の組の右端のスペードの8を表向きのまま左手に置き、つぎは2の組の右端のクラブの3を取って左手のカードの上に置き、以下、下に向かって取って左手のカードの上に重ねていき、5組まで取ったら1組の右端に戻り、以下そのようにしてスペードのKまで取ります。最後に右に描かれているハートのKとQをのせて、27枚のセットの完了です。

このチャートにもとづいてセットすると、取り替えるカードが必ず配られた5枚のボトムにディールされます。しかも各組の並び方があまりにも整列して不自然です。各組に示された5枚が配られればよいのですから、各組をチャートのように置いたあと、各組の5枚の順をよく混ぜた感じに並べ替えてから、カードを集めるようにするとよいと思います。

もちろん各組を見せるときは、いったんそのまま表向きにして見せ、それから入れ替えて役がわかるよう示します。

*** 追 記 *** (2013年9月13日)

この'ポーカーデモンストレーション'をどこか他の文献で見たことがあると思って調べたところ、"アーリーバーノン"(1962年)に書かれていました。この本はバーノンの若かりしころの作品を集めたものですが、その主体となっているのは、"テンカードプロブレム"(1932年発行)の丸ごと再録部分です。"テンカードプロブレム"は、20ドルという当時の貨幣価値からしたら途方もない値段で売られたもので、むしろ"トウェンティダラーマニユスクリプト"という名称が有名です。

その小冊子の中に、上記の'ポーカーデモンストレーション'の原形が収録されているのです。原形と言っても、観客から見た現象の運びはまったく違いがありません。カードのハンドリングがごく一部違うだけです。

すでにほとんど同じものが発行されていたのに、その掲載許可を与えるのに、チェスの試合をしたというのですから、バーノンもちやっかりしていたと笑ってしまいます。

パーペチュアルモーションポーカー

=ブルース・サーボン、雑誌"カーディステ"、No.13、1969年 =

たんにスタックされたデッキから5枚のカードを5人にディールするのを繰り返すだけで、ディーラーに次第に強い手が配られていくというポーカーデモンストレーションです。終わったときに最初と同じ状態になっている、という点がたいへん有り難いので、このトリック専用デッキ用意することをお勧めします。

*** 準 備 ***

50枚のカードをつぎの通りにスタックします。

9D、9C、9S、9H、3C、X、X、X、X、7C、X、X、X、X、2C、X、X、X、X、8C、X、X、X、X、5C、QH、10H、JH、AH、KH、4C、4S、4D、4H、6C、2S、2D、2H、KD、KS、7D、QD、8D、5D、6D、AC、AS、JC、JD、KC。

* 方 法 *

フォールスシャフルとフォールスカットを行います。そして5人にドローポーカーの手を配ります。ディーラーにはクラブのフラッシュがそろうので、それを見せます。5人目(ディーラー)のカードを4人目のカードの上のにせ、それらを3人目のカードの上のにせ、それらを2人目のカードの上のにせ、それらを1人目のカードの上のにせてそろえ、それらを手元のカードの下に入れます。

同じように5人に配ると、こんどはディーラーにフルハウスがきますので、それを見せます。まえと同様にカードを集めて手元のカードの下に入れます。

同じように5人に配ると、こんどはディーラーに9のフォーカードがきますので、それを見せます。同じようにカードを集めます。

同じように5人に配り、「最後は他のプレイヤーのカードも見てみましょう」と言って、1人目のカードを見せるとツーペア、2人目はダイヤのフラッシュ、3人目はフルハウス、4人目はフォーカードと次第に強くなっていきます。「こんどの勝負は手強いですね。でもこれなら大丈夫です」と言って、ディーラーのロイヤルフラッシュを見せます。

* 備 考 *

ブルース・サーボンは述べています。“このポーカーディールは、巧妙性という点では歴史の中で消える運命にあるでしょう。しかし、つねに観客に見せる機会の多いプロにとっては、実用的な方法として使われ続けるでしょう”と。私はその意味がよくわかります。解説を読んですぐに専用のデッキを作りました。

ポーカー

= ロイ・ウォルトン、雑誌“ペンタグラム”、1955年12月 =

何人のプレイヤーにカードを配るか客に指定させて、客が何人を指定しようとも、その人数分ディールすると、ディーラーにいちばん強い役が配られる、という現象の先駆けであり、2人から10人の何人を指定されてもよいという、極めつけのバージョンです。

* 準 備 *

デッキのトップよりつぎの順にスタックします。

5S、KS、9C、KH、JD、QC、AD、QH、9S、3S、3C、10H、2C、2D、2H、JH、5H、10S、4H、AH、3D、4S、7H、9H、JC、8D、8S、4D、6D、10D、9D、QD、6C、3H、5D、6S、2S、6H、5C、QS、8C、AS、10C、KD、7S、7D、7C、8H、KC、AC、JS、4C。

*** 方 法 ***

デッキ全体を保つフォールスシャフルをやってから、デッキを相手に渡します。

ポーカーを何人でやっても必ずディーラーが勝つという話をして、相手に2人から10人までで何人でプレイするかを指定させます。

相手にその人数分をディールさせます。そうするとディーラーに配られるのは人数によって、以下の通りとなり、どれも他のプレイヤーより強い役です。

2人の場合：KとQのツーペア

3人の場合：2のカードはワイルドカードなので、9のスリーカードとなります。

4人の場合：ハートのロイヤルフラッシュ

5人の場合：2のカードはワイルドカードなので、Jのスリーカードとなります。

6人の場合：10のスリーカード

7人の場合：ダイヤのストレートフラッシュ

8人の場合：Qのスリーカード

9人の場合：スペードのストレートフラッシュ

10人の場合：Aのワンペア

*** 備 考 ***

この作品は、演じるレパートリーのひとつとして解説したのではなく、ポーカーディールのひとつのジャンルの代表として収録いたしました。

フォートウーナイン

= 加藤英夫、“研究ノート”、1998年3月15日 =

このポーカードデモンストレーションは、4人から9人の間の好きな人数を相手に指定させ、その人数に5枚ずつディールすると、あなたの手元に4枚のKが配られるというものです。

この作品の演技価値は、私自身それほど評価していませんが、つぎに解説する‘エニイナンバーディール’の土台となったものなので収録いたしました。

* 方法 *

シャフルされたデッキから、4、5、6、7、8、9のカードを1枚ずつ抜き出してテーブルに置きます。つぎに4枚のKを抜き出してテーブルに置きます。「ギャンブラーが4枚のKを自分に配るテクニックをお見せします。ギャンブラーはKを特定の位置に配置しておきます」と言って、デッキを表向きにファンに広げて、Kを表向きにファンにさし入れていきますが、4枚のKの間にそれぞれ5枚のカードがはさまるように入れます。

そして4枚のKの中に押し込みますが、いちばんトップに近いKの左4枚目のカードを記憶しておきます。そしてカードを閉じて裏向きにすると、記憶したカードがトップにくるようにカットします。これでトップから5枚目に1枚目のKがあり、そのあとのKは6枚ごとにあります。

初めに抜き出した6枚のカードの表を見せ、「これから何人かのプレーヤーにカードを配りますが、何人でプレーするかをあなたにこちらのカードを使って決めていただきます。この6枚の中から1枚ずつ減らして行って、最後に残ったカードの数を使うことにします」と説明し、6枚を裏向きにしてテーブルに置き、相手に1枚ずつ選んであなたに渡してもらいます。1枚受け取るごとにその数を見せて、「5は使いません」と受け取ったカードの数を言います。

5枚目を受け取ったときに最後のカードの数がわかりますから、残っている1枚の数によって、受け取った5枚の扱いが違ってきます。

5のカードが残っている場合、受け取った5枚をデッキの上でそろえ、そのまま5枚をボトムに入れます。

6のカードの場合は、そろえつつ5枚のうちの1枚をデッキのトップに落として4枚をボトムにまわします。

7では3枚ボトムにまわします。

8では2枚ボトムにまわします。

9の場合は、5枚をトップにのせてそろえます。

4の場合は、5枚の下にトップから2枚のカードをスチールして、7枚をボトムにまわします。

最後に残ったカードを指さして、「このカードが7ですから、7人に配ります」と、そのカードの数を言います。最後のカードの数によって、その人数分5枚ずつディールしますが、人数によってつぎのように対処します。

6の場合

6の場合はいっさいフォースディールなしで6人に5枚ずつディールすれば、自分に4枚のKが配られます。

5と7と8の場合

最初の1ラウンド目は、フォールスディールなしで自分までディールし、そのあとはトップから6枚ごとにKがあることを意識して、自分以外のところでトップにKがきたらセカンドディールをスタートし、自分のところでトップにキープしてきたKをディールします。そのあとも6枚ごとのKの位置のカウントを続け、同様にして自分にKを配ります。

4の場合

1ラウンド目は、3枚目でセカンドディールして、4枚目にKを置きます。そのあとは、つぎの5枚目、6枚目、6枚目にKがあることを意識して、自分以外のところにKがきたらセカンドディールし、自分のところにKをディールします。3枚目はK以外のカードをディールすることになります。

9の場合

1ラウンド目は、9枚目でセカンドディールして、自分にKを置きます。そのあとは、つぎの7枚目、6枚目、6枚目にKがあることを意識して、自分以外のところにKがきたらセカンドディールし、自分のところにKをディールします。

他のプレイヤーに配られたカードを見せたあと、マジシャンにKのフォーカードが配られているのを見せます。

ファイブトゥーエイト

= 加藤英夫、“研究ノート”、1998年3月16日 =

‘フォー・トゥー・ナイン’では、ディールする人数によってトップ部分の枚数を調整していますが、人数を5人から8人と狭めることによって、トップ部分の調整をせずに4枚の同数カードをディールすることが可能になります。しかも同一セットで、5人から8人のうち何人にもディールできるだけでなく、4枚のKでも4枚のAでも好きな方をディールできるという利点を利用して、5つのデッキを使用したトリックを組み立てました。

この作品は演ずるのに時間がかかりすぎ、けして実演する価値はありませんが、そこまで考えたという記録として収録させていただきました。考案者の自己満足と言われればそれまでですが。

* 準備 *

5つのデッキをすべてつぎの同一のスタックとします。AとKのマークは自由です。

トップより、X、X、X、K、A、X、X、X、X、X、K、A、X、X、X、X、X、K、A、X、X、X、X、X、K、A、X、X、X、X、X、K、A、.....。それぞれのデッキをケースに入れておきます。

* 方法 *

「ギャンブラーはカードを自由に配ることができます。今日は、ポーカーで4枚のK、すなわちKのフォーカードを自分に配るテクニックをお見せします。自由に配るといっても、あらかじめ目的のカードを特定の位置に準備する必要があります。ここに準備したカードが何組かあります。まず5人でプレーする場合をお見せします。どのカードを使うか指定してください」と言って、1組のデッキを選ばせます。

いっさい怪しい手つきなしで、指定されたデッキをケースから出します。「最初は5人に配ります」と言って、5人にディールしますが、1枚目のKは4枚目にあり、そのつぎからは7枚目ごとにKがあることを意識して、自分以外のときにトップにKあったらセカンドディールして、自分にKをディールします。7枚ごとのカウントを続けて、セカンドディールとノーマルディールを使い分けて、自分に4枚のKをディールします。これは5人にかぎらず、他の人数の場合も同様です。自分に配られたカードを表向きにして、Kのフォーカードを見せます。使ったカードをそろえてわきにどけます。

「つぎは6人に配ります。どのカードを使いましょうか」と言って、デッキを選択させ、そのデッキを注意深くケースから出し、ボトムカードを表向きにし、そして6人にディールして、自分に4枚のKを配り、配られた5枚を表向きにして見せます。使ったカードをそろえてわきにどけます。

同様にしてデッキを選択させ、7人にディールし、自分にKのフォーカードが配られたのを見せます。

カードをそろえてわきにどけます。同様につぎのデッキを選択させて、8人にディールして、自分にKのフォーカードが配られたのを見せます。

「さて1組残りました。最後はあなたに人数を指定していただいて、その人数でフォーカードを配って見せましょう」と言って、最後のデッキをケースから取り出して、「5人から8人までで、何人に配るか指定してください」と言います。

4枚のAは上から5枚目からスタートして、7枚ごとにあります。そのことを意識して、相手の指定した人数にディールし、あなたのところに4枚のAをディールします。すべて配ったら、「もちろんこちらにKはありません」と言いながら、自分以外の手を表向きにします。それらの中にKがあるのに気づいて驚いた顔つきをします。「失敗したわけではありません。Kより強いカードのフォーカードを配りました」と言って、自分にAのフォーカードが配られているのを見せます。

* 追 記 * (2013年9月13日)

この作品を読み返して、いくら何でもKやAの位置を心の中でトレースするのはたいへんです。とてもやる気が起きません。そこで簡単な解決法を思いつきました。それはKの裏面にドットをつけておくことです。Aはドットカードのつぎにあると意識してやります。

フォートゥーシックス

= 加藤英夫、“研究ノート”、2013年9月13日 =

前作の‘ファイブトゥーエイト’が実演するようなものではないことは、あまりにも多くのカードをディールするのに時間がかかり過ぎるからです。合計で130枚ディールするわけですから。少しでも実演価値のあるものとするには、どうしたらよいでしょうか。それにはディールする回数を減らせばよいのです。

かくしてこの作品は、実演するに値する作品になったと思います。

* 準 備 *

4組を使用します。それぞれをトップより、K、A、X、X、X、K、A、X、X、X、K、A、X、X、X、K、A、X、X、X、……とセットします。

* 方 法 *

‘ファイブトゥーエイト’と同じことを、4人にディールする、5人にディールする、6人にディールすると進めるか、逆に6人にディールする、5人にディールする、4人にディールすると進めて、最後に残った組で、相手の指定した人数分にディールして、Aのフォーカードを現します。

エニナンバーディー

= 加藤英夫、“研究ノート”、1998年3月19日 =

* 準備 *

デッキをトップより、つぎのようにセットします。マークはランダムなものとしします。

8、5、2、5、4、2、4、J、2、J、Q、2、Q、9、8、7、K、3、A、6、10、7、K、3、A、6、10、7、K、3、A、6、10、7、K、3、A、6、10、9、Q、J、4、5、8、9、Q、J、4、5、8、9。

* 方法 *

「ギャンブラーの夢は、好きなカードをどんなときにも自分に配れるようになることです。ポーカーはたいい5人ぐらいでプレーしますが、もっと少い人数でも多い人数でプレーするときでも、つねに対処できなければなりません。たとえば3人でプレーするとして、自分に2のフォーカードを配るとしましょう」と話をしてから、カードを3人に5枚ずつ配ります。

セット通りのデッキのトップから配ると、自分に4枚の2が配られます。自分の5枚を表向きにして、「このように2のフォーカードを配ることができました」と言って、1人目のカード5枚をデッキのボトムに置き、つぎに2人目のカードをボトムに置きます。そして自分に配られた5枚のうち2以外のカードをデッキのボトムに置きます。4枚の2を表向きのままわきに置きます。

「いまのは小手調べです」と言って、デッキを表向きにリボン Spredd します。カードを指さし、「この中から好きなカードを指さしてください。そのカードと同じ数のフォーカードを配って見せます」と言います。相手が9のカードを指さしたとします。Spredd の中のいちばん左にある9のカードを見つけます。相手の指さした9から左に目を追ってゆけばよいのです。そしてその9からさらに左に数えて5枚目のカードをキーカードとして記憶します。

「つぎに何人のプレーヤーにカードを配るか決めてください。4人から9人の間の好きな人数を選んでください。4人でもいいですし、9人でもかまいません。相手が6人を指定したら、カードをそろえて裏向きに持つとき、キーカードがトップにくるようにカットもしくはパスします。5人が指定されたら、キーカードより1枚下のカードがトップにくるように、4人が指定されたら、キーカードより3枚下のカードがトップにくるようにします。7人が指定されたら、キーカードより1枚上のカード、8人が指定されたら、キーカードより2枚上のカード、9人が指定されたら、キーカードより4枚上のカードがトップにくるようにします。

これで'フォートゥーナイン'で説明されている方法によって、指定された人数にディーリングして、目的の数のカード4枚を自分に配ることができます。そして結果を見せます。

30 世紀のポーカードィール

= ベン・エーレンズ、"ギャンブラーズパラダイス"、1960 年 =

4 人にディールするようにセットされたカードを、5 枚ずつ見せるとフルハウスやフォーカードなど、ロイヤルフラッシュを連想されない組み合わせになる、というのがこのトリックの面白いところです。

* 準備 *

トップより、10C、10H、10S、JD、JC、JH、JS、QD、QC、QH、QS、KD、KC、KH、KS、AD、AC、AH、AS、10D とセットします。10 から A をダクハスの順に並べ、トップのダイヤの 10 をボトムにまわし、これらをデッキのトップに置く、と記憶してください。ボトムカードをクリンプしておきます。

* 方法 *

「マジシャンはシャフルやカットで、好きなカードをコントロールすることができます。それをポーカードの役によってお見せしましょう」と話をします。

フォールスシャフルとフォールスカットののち、トップの 5 枚を見せます。10 と J のフルハウスです。この 5 枚を順を変えずにボトムに置きます。

ふたたびフォールスシャフルとフォールスカットののち、トップの 5 枚を見せます。J と Q のフルハウスです。まえよりも強い手になったことを言います。これらをボトムに置き、同じことをあと 2 回繰り返し、K のフォーカード、A のフォーカードを見せます。次第に良い手になっていくことを言います。

クリンプの下でカットして、ボトムの 20 枚をトップにまわしますが、20 枚の下にブレイクを作り、ブレイクの上のダイヤの 10 をサイドスチールしてトップに置きます。この状態で 4 人にポーカードの手を配ります。すべてロイヤルフラッシュとなります。自分以外の手を表向きにしたあと、「3 人とも良い手ですが、私の手は同じロイヤルフラッシュでも、いちばん強いスペードのロイヤルフラッシュです」と言って、自分に配られた 5 枚を表向きにします。

* 備考 *

つぎのようにすれば、サイドスチールでダイヤの 10 を移動させる必要がありません。

上記に説明されたトップ 20 枚のセットのうち、最初の 19 枚をトップに置き、ダイヤの 10 はボトムに置きます。それからボトムから 2 枚目をクリンプしておきます。

このセットで説明通り行くと、Aのフォーカードを見せるとき、4枚のAとダイヤの10ではなく、4枚のAと他のカード1枚となります。それら5枚をボトムに置いたあと、ブレイクからカットすればダイヤの10がトップにきて、4人にディールするとすべてロイヤルフラッシュとなります。

*** 追記 * (2013年9月2日)**

このトリックでは、最初にデッキをフォールスシャフルすることが重要です。ですから、上記の備考のように、トップとボトムにセットしておく、フォールスシャフルがやりにくいのです。

それを解決するには、ボトムに置いたダイヤの10とクリンプカードをトップにまわせばよいのです。そうすればトップ21枚を保つフォールスシャフルのあと、ダブルカットでトップの2枚をボトムにまわせば原案の通りに進められます。

トップ21枚を保つには、オーバーハンドシャフルでジョグシャフルをやれば、全体をよくシャフルしたように見えます。すなわち1回目のテイクで21枚以上左手に取り、つぎの1枚をインジョグし、あとのカードをふつうにシャフルし、ジョグカードの下からカットして上にまわせばよいのです。

また最初の5枚をボトムにまわしたあとは、トップとボトムを保つフォールスシャフルというのはたいへんです。シャフルはできませんが、つぎのようにやるとスムーズに演じられます。

見せた5枚をボトムにではなく、トップに置きます。そのとき5枚の下にブレイクを作ります。そしてそのブレイクを利用して、ダブルアンダーカットを行います。

31 世紀のポーカードィール

= 加藤英夫、2013年9月2日 =

‘30世紀のポーカードィール’の原案では、いくらフォールスシャフルしたとしても、つねに絵札やAや10ばかり現れるという現象から、それなりのセットがされていたことを暗示してまいります。ならば最初から、20枚のカードだけを使うパケットトリックとして構成したらどうだろうかと考えました。おそらく、他の32枚のカードを使わない方が、次第に強い手が現れるという現象がクリアに表現できると思いました。

しかも20枚ならチャーリエシャフルという強力な武器が使えます。カードを混ぜた印象が強く表現できます。

*** 準備 ***

すべてのマークのロイヤルフラッシュのカード、合計20枚をトップよりつぎのようにセットします。

JC、QH、KS、10D、JD、QC、KH、AS、10S、QD、KC、AH、10H、JS、KD、AC、10C、JH、QS、AD。

*** 方 法 ***

「ポーカーに関するマジックですが、ここに強い手ができるカード 20 枚があります」と言って、表向きにスプレッドして見せます。スプレッドを閉じてそろえ、裏向きに左手に持ちます。

「4 人でプレイするとしたら、ポーカーではこのようにカードを配ります」と言って、4 人に配ります。9 時の位置から時計まわりにディールするのです。それから 4 組を集めますが、6 時の位置から反時計まわりに取って左手に重ねていきます。「実際の勝負では、配るまえにカードを混ぜます」と言って、チャールエシヤルしますが、もとの状態に戻るようやります。

「テクニックのすごいギャンブラーは、好きなカードを好きな位置にコントロールすることができます。たとえばこの 5 枚のカードを見てみましょう」と言って、トップから 5 枚広げて右手に取り、右手を返してそれが 10 と J のフルハウスであるの見せます。5 枚を閉じてボトムに入れます。

「もっと強いカードをコントロールすることもできます」と言って、順が変わらないチャールエシヤルを行います。そしてトップの 5 枚を先ほどと同じように見せ、Q と J のフルハウスなので先ほどより強い役になっていることを言います。

同じようにして、K のフォーカード、A のフォーカードを見せます。A のフォーカードを見せたあとは、5 枚をそろえる振りをして、ボトムのダイヤの 10 をトップにサブトラクト（落とすこと）して、4 枚をボトムにまわします。

「いよいよ勝負の本番です。4 人に配ります」と言って、4 人分をディールします。すべてロイヤルフラッシュになります。

「その日の勝負相手は、そのギャンブラーの親しい友人ばかりだったので、ちょっと悪戯をしました。掛金が大金になったあと、1 人目のプレイヤーがカードを開けると、それはダイヤのロイヤルフラッシュでした。ですから彼は掛金に手を伸ばしました。すると 2 人目のプレイヤーと 3 人目のプレイヤーが自分のカードを開けました。彼らのカードもロイヤルフラッシュでした。そしてギャンブラーのカードもロイヤルフラッシュだったのです。勝負は引き分けです」と言って、終わります。

*** 備 考 ***

引き分けで終わるといのが面白味がないとしたら、ギャンブラー以外の 3 人のマークの混ざったストレートフラッシュで、ギャンブラーのがスペードのロイヤルフラッシュだった、という終わり方はいかがでしょう。セットの仕方はご自分で考えてください。

32 世紀のポーカードィール

= 加藤英夫、2013 年 9 月 2 日 =

* 準備 *

各マークのロイヤルフラッシュ 5 枚ずつを以下のように、コンビネーションストリッパー加工します。

ダイヤの 5 枚は上左型、クラブの 5 枚は上右型、ハートの 5 枚は下左型、スペードの 5 枚は下右型。コンビネーションストリッパー加工については、“Card Magic Library” 第 10 巻、203 ページに解説されています。

方向がでたらめに混ざらないように、ひとつのコーナー近くに目印のドットをつけておき、方向をそえます。そして‘31 世紀のポーカードィール’の準備に書かれている順番にセットします。

* 方法 *

‘31 世紀のポーカードィール’の通りに演じます。途中でカードの方向が逆にならないようにしてください。

4 組のロイヤルフラッシュを見せたあと、すべてのカードをそろえて裏向きに持ちます。「いまお見せしたのは、ギャンブラーのテクニックでやる方法でした。つぎはマジシャンのやり方をお見せします」と言って、トップから 4 枚を左から右に並べて置きます。

つぎの 1 枚を右手に取り、「つぎのカードをどこに置くか、あなたに決めていただきます。どれでもカードを指さしてください」と言って、指さされたカードの上に右手のカードを、図 1 のように前にずらして置きます。



つぎのカードを取り、「つぎはどれに置きましょうか。ここか、ここか、ここ、それともまえに置いたカードの上に置いてかまいません。指さしてください」と言って、相手が指さしたカードの上にずらしておきます。

そのようにしてすべてのカードを分散させて置いていきますが、ひとつの組は 5 枚までとします。それをうまく相手に伝えてください。

4 組に 5 枚ずつ配られたら、「あなたの指示通りに置いたので、それぞれの組がどんな役になっているかはわかりません。こちらの組は」と言って、左端の組を取り、広げて表を相手に見せ、

その5枚が構成している役を告げます。その5枚をそろえてもとの位置に置きます。あとの3組も同様に見せて役を告げます。

左端の組を取って左手に置き、右手でつぎの組を取って左手の組に重ねます。つぎの組を取って左手に持ちますが、それまでに取った10枚より前にずらして持ちます。図2。最後の組を取り、前にずらしてある5枚の上になるように置きます。



「マジシャンはシャフルをせずにそのままカードをテーブルに置きました」と言って、右手を図3のようにカードにかけて、左人さし指でずれているカードを手前に押し、それに続けて右手は縦方向のストリッパーを抜いて、抜けた10枚をテーブルの右の方に置きます。



「それからさらにカードを分けてテーブルに置きました」と言いながら、左手の10枚を横方向のストリッパーで抜いて、左手と右手の5枚ずつをテーブルに置きます。右に置いてある10枚を取り上げて、同様に左右の手で横方向に抜いて5枚ずつをテーブルに置きます。これで4組のピイルができました。

「マジシャンはカードに魔法をかけました」と言って、各ピイルに魔法をかけます。「するとこのようなことが起こりました」と言って、各組がロイヤルフラッシュになっていることを見せます。

* 備考 *

‘31世紀のポーカーディーラー’の備考において、“ギャンブラー以外の3人がマークの混ざったストレートフラッシュで、ギャンブラーのがスペードのロイヤルフラッシュだった、という終わり方はいかがでしょうか”と書きました。

‘32世紀のポーカーディーラー’において、そのやり方を取り入れるべきか否か、ということを考えて、もうひとつの見せ方があることに気づきました。

この‘32世紀のポーカーディーラー’では、前半はギャンブラーのやり方で行い、後半はマジシャンのやり方で行う、というプレゼンテーションで構成しているのですから、前半でギャンブラー以外がストレートフラッシュでギャンブラーだけロイヤルフラッシュになる、というのは適していません。

前半のギャンブラーのやり方では、すべてがマークの混ざったストレートフラッシュを得て、後半のマジシャンのやり方をすると、すべてがマークがそろったロイヤルフラッシュとなる、とした方が前半の現象と後半の現象のコントラストが明確になり、ギャンブラーのやり方とマジシャンのやり方の違いも明確になります。

このようにマジックにおいて繰り返しの手順を構成する場合、ひとつ目の現象とふたつ目の現象のコントラスト、もしくは関連性というものに配慮してマジックを構成するということも、マジシャンとしては配慮する必要があるのです。

前半で、4人すべてがマークの混ざったストレートフラッシュになるようにするには、マークの順をすべてダクハスにするのではなく、その順を乱せばよいのです。ひとつの例を書いておきます。

JS、QC、KS、10D、JH、QH、KH、AH、10S、QS、KC、AS、10H、JC、KD、AD、10C、JD、QD、AC。

スペクテイターズディール

= 加藤英夫、“研究ノート”、1998年2月19日 =

* 方 法 *

デッキからスペードのロイヤルフラッシュの5枚(10S、JS、QS、KS、AS)を抜き出して、テーブルに表向きに置きます。

デッキを裏向きにして持ち、トップから4枚を広げて右手に持ちます。相手にロイヤルフラッシュのカードのうち1枚を取らせ、裏向きに持たせます。「この4枚の間にそのカードを入れてください。何枚目に入れてもいいですよ」と言います。相手にカードを入れさせるのは、あくまでも2、3、4枚目のどれかで、トップとかボトムに入れさせてはいけません。「ここか、ここか、このどこにいられてもいいですよ」と、カードを指さしながら説明するとよいでしょう。

相手がカードを入れたら、5枚をデッキの上でそろえ、5枚をテーブルに置きます。相手が入れたカードの上に何枚のカードがあるか記憶します。説明上、相手が入れたカードの上にX枚のカードがあるとして、X枚は1枚か、2枚か、3枚になります。

相手に2枚目のロイヤルフラッシュのカードを取らせ、あなたはトップから4枚をまえと同じように広げて取り、相手のカードを好きな枚数目に入れさせます。このとき、相手が入れたカードの下にY枚のカードがあるとして、この5枚をそのままテーブル上のカードにのせると、まえに置いたパケットの中にあるロイヤルフラッシュのカードと、こんどのパケットの中にあるロイヤルフラッシュのカードの間に、合計X+Y枚のカードがはさまることになります。

その合計をつねに4枚になるように調整して各パケットを重ねていけば、あとでカードを5人にディールすれば、1人にロイヤルフラッシュの5枚が配られることとなります。

$X+Y=4$ であれば、何もせずにそのままパケットをまへのパケットの上に重ねます。

$X+Y=5$ であれば、パケットをデッキの上でそろえるときに、パケットのボトムからデッキのトップへ1枚のカードを密かに捨ててから、まへのパケットの上にのせます。

$X+Y=6$ の場合は、ボトムから2枚のカードを捨てます。

$X+Y=3$ の場合は、逆にデッキのトップから1枚のカードをパケットのボトムに加えます。

$X+Y=2$ の場合は2枚のカードを加えます。

そのようにまへのフラッシュカードとこんどのフラッシュカードの間のカードが4枚になるように調整し、しかもパケットをテーブルに置いたときに、いまロイヤルフラッシュのカードの上に何枚あるかを記憶しておく必要があります。この部分が間違いやすいので、よく練習してください。

そのようにして5つのパケットを重ね、最後のロイヤルフラッシュのカードがトップから何枚目になったかにより、それがトップから5枚目になるように上にカードを加える必要があります。これは残りのデッキからパームして行ってもいいですし、デッキのボトムからパケットトランスファーでテーブルのパケットに加えてもかまいません。

テーブル上のカードを手元のカードの上にのせ、デッキを相手に渡します。相手にカードを5人分ディールさせますが、5枚目は相手の前に置くようにさせます。適当なセリフを言ってから、他の4人のカードを見せたあと、ドラマチックに相手の前の5枚を表向きにさせます。

*** 備 考 ***

最後に何枚かトップに加えることによって、1枚目のフラッシュカードがトップから5枚目になるように調整していますが、このトリックをマジックカフェに投稿したとき、調整不要の演じ方を書きました。

調整しないまま相手にディールさせ、「この組が勝つと予言します」と言って、ロイヤルフラッシュの組の上にコインをのせ、他の手を見せてから、その組がロイヤルフラッシュであるのを見せます。

*** 追 記 *** (2013年9月5日)

もうひとつパームによってカードを加える必要のないやり方を思いつきました。

5組を重ねたあと、その25枚を残りのカードの上に重ねないで、残りのカードはわきに捨て、その25枚を取り上げて、両手の間に広げて言います。「ロイヤルフラッシュのカードはこの中にランダムに分散されました。ポーカーでは、カードを配るまえに1回カットします」と言って、トップからしかるべき枚数の下にブレイクを作って閉じ、そこからカットします。そしてパケットを相手に渡してディーラーさせます。

ディミニッシングディーラー

= 加藤英夫、“研究ノート”、1999年2月28日 =

* 方法 *

ポーカーのプレイにおいて、最強のギャンブラーの話をきかせると言ってスタートします。

デッキからスペードのロイヤルフラッシュを表向きに抜き出します。それらを裏向きにして、その上に5枚ずつ4組のカードを加え、残りのカードは使わないのでわきにおきます。

25枚を取り上げ、始めは5人でプレイしていたと言って、5人に5枚のカードを配ります。ロイヤルフラッシュのカードは各組に分散されたと言って、ディーラーの5枚をちらっと見せます。5組を重ねて取り上げます。

「あまりにもそのギャンブラーが強いので、1人のプレーヤーがゲームから抜けて、4人でプレーを続けました」と言って4人にディーラーしますが、セカンドディーラーを使ってディーラーに5枚のロイヤルフラッシュがくるようにディーラーします。すなわち、1ラウンド目は1枚目でセカンドディーラーをスタートし、2ラウンド目は2枚目でセカンドディーラーをスタートし、3ラウンド目は3枚目でセカンドディーラーをスタートし、4ラウンド目はセカンドディーラーなし、5ラウンド目は最後のカードでセカンドディーラーします。

残った5枚を広げて見せ、「残りのカードは捨てます」と言います。

4つのパケットを重ねて取り上げますが、ディーラーのパケットを上から3番目にします。3人にディーラーしますが、こんどはフォールスディーラーしません。残りの5枚を捨てます。3つのパケットを重ねますが、1人目のパケットをいちばん下にします。

「また1人プレーヤーが減って、2人の勝負になりました」と言ってカードを取り上げ、上から3枚目の下にブレイクを作ります。そして1枚目はブレイクの下からミドルディーラーして相手にディーラーします。そのあと、3、7、10枚目でセカンドディーラーします。残りのカードを捨てます。

「これが最後の勝負です。相手の手は、この通りです」と言って、相手のカードを見せてから、デッキの上に捨てます。「最後に最強のギャンブラーは、最強のカードを手に入れました」と言って、ロイヤルフラッシュを見せます。

リピートポーカーディール

= ダイ・バーノン、雑誌“ポールベアラーズレビュー”、1968年冬号 =

* 方法 *

デッキから10S、AH、AD、KH、KD、AS、JS、KS、QS、ACをこの順に抜き出して使います。フォー
ルスシャフルののち、相手と自分にポーカーの手を表向きに配ります。相手はストレートですが、
あなたはとフルハウスになります。

両方を裏向きにして、相手のカードをあなたのカードの上のにせます。そして同じように2人に配
ります。こんどは相手はスリーカードで、こちらはAのフォーカードです。

両方を裏向きにして、あなたのカードを相手のカードの上のにせます。そしてこんどは裏向きに
ディールします。相手の手がフルハウスなので「こんどはあなたの勝ちでしょう」と言ってから、
あなたの手がスペードのロイヤルフラッシュであることを見せます。

オートマッチクポーカー

= ジム・スタインメイヤー、“インパジビリティズ”、2002年 =

CATOで奇数枚をひっくり返すという、珍しいトリックです。

* 方法 *

2、X、2、X、8、X、2、X、8、X、のように、フルハウスの5枚の間に無関係カードをはさん
だ10枚を使います。ポーカーの名人の話をして演じます。

相手に10枚を渡し、好きなところからカットして、トップの3枚をひっくり返させます。さらに好き
なところからカットしてトップの3枚をひっくり返すというのを、好きな回数やらせます。

2人にポーカーのように配らせます。すると、裏と表は混ざっていますが、どちらかにフルハウス
が配られます。どちらにフルハウスが配られたかによって、セリフを合わせます。

* 備考 *

一方にフルハウスが現れて、他方がでたらめのカードが現れる、というのは締まりがありません。
私ならつぎのように演じます。

一方がフルハウスで、他方がロイヤルフラッシュとすることによって、ストーリーも面白くなりま
す。どちらにロイヤルフラッシュが配られたかによって、つぎのように対処します。

マジシャンに配られた場合

先にギャンブラーに配られたフルハウスを見せ、「さすが最強のギャンブラーですね」と言います。それから「でも最強のマジシャンにはかないません」と言って、マジシャンのロイヤルフラッシュを見せます。

ギャンブラーに配られた場合

先にマジシャンのフルハウスを見せ、「さすがマジシャンです。こんな強いカードがそろいました」と言います。それから「でもいくらマジシャンでも最強のギャンブラーにはかないません」と言って、ギャンブラーのロイヤルフラッシュを見せます。

なお、いきなり相手に3枚のCATOをやるのは望ましくないと思います。まずマジシャンがチャーリエシャフルをやってから、それから「もっとでたらめな混ぜ方をします」と言って、マジシャンが3枚のCATOを行い、「あなたもこのやり方で混ぜてください」と言って、相手にも3枚のCATOをやらせます。

ビッグハンズ

= ボブ・ロング、“リトルジャイアントブックオブカードトリックス”、2000年 =

この作品自体は演じたいと思うものではありませんが、つぎに解説した私のバリエーションとの関係で収録いたしました。

* 方法 *

各マークの10、J、Q、K、Aを抜き出して、他のカードは使いません。相手に20枚をシャフルさせたあと、5つのパイルに表向きにディーリングします。各パイル4枚ずつとなります。すべてのカードのインデックスが見えるように、各カードを少し広げた状態で置きます。

各パイルを見渡して、ひとつのマークのカードがなるべく分散しているを見つけます。ときには、あるマークのカードが各パイルに1枚ずつあるということも起こりますが、たいていの場合、3枚が3つのパイルに分散し、残りの2枚が他のひとつのパイルにある、という状態になります。たとえばハートのカードがそのような状態になっているとして、説明を続けます。

ハートが1枚入っているパイルを取り上げ、カードを適当に入れ替えながら、その4枚で構成されるポーカーの役を告げます。そしてハートのカードをトップから2枚目に位置させます。このパイルをテーブルに置き、ハートが1枚入っている2番目のパイルを取り上げます。このパイルでも同様のことを行い、まえのパイルの上に重ねます。ハートが1枚入っている3番目のパイルでも同じことを行います。

つぎに残りの2つのパイルを取り上げ、「もしもカードを取り替えるとしたら、もっと強い役ができます」と言って、ハートをトップから2枚目と6枚目に位置させながら、4枚と4枚に分けたときに、どちらかに強い役ができるように並べ替え、4枚と4枚に分けて、できた役を告げます。

持っている2つのパイルを重ね、それらをテーブルのどれかのパイルに重ね、残りのパイルも重ねます。これでハートのカードは5枚おきに配置されました。

相手にカードをカットさせてから、4人にディールしますが、各パイルの1枚目だけスタッドポーカーのように、表向きにディールし、他の4枚は裏向きにディールします。2枚目以降ははずらして置いていき、表向きのカードが見えるようにします。

「あなたならどの山を選びますか」とたずね、相手がハートの山を選んだら、それを使うこととし、違う山を指摘したら、「私だったらこちらがいいと思います」と言って、ハートの山を選び、相手の前に置きます。

他の山のカードを表向きにして見せたあと、ハートの山のカードを表向きにして、ハートのフラッシュがそろったのを見せます。

*** 備 考 ***

もしも上記のような状態にならなかった場合には、フラッシュではなく、フォーカードが3つもしくは4つのパイルに分散されているのを見つけ、フォーカードを現すことに切り替えます。

パソコンで確率シミュレーションを行った結果、上記のようになる確率は91.5%であるとわかりました。フォーオブアカインドの確率は99%以上ありますので、どちらかにもならない確率は、1万回に5回以内となります。

ビッグディール

= 加藤英夫、“研究ノート”、2002年1月23日 =

ボブ・ロングの’ビッグハンズ’は、まったくランダムにディールしても、ロイヤルフラッシュもしくはフォーオブアカインドのカードが、別々のパイルに分散する確率が高い、という性質を見つけただけでも、ロングの功績は大きいと思います。しかしながら、それぞれのパイル内のカードを入れ替えるという行為は、不思議さを生み出すには、あまりにも大きな障害です。さらに、ポーカーの話をしているのに、各パイルに4枚ずつしかディールしないのは、まことにアブノーマルです。

その2つの欠点を改善しようとして考えたのが、これから説明するマジックです。5人のプレイヤーに5枚ずつ配るには、25枚のカードを使えばよいのです。ボブ・ロングは、ロイヤ

ルフラッシュ 4 組を使うという条件に縛られてしまったようです。

面白いことに、ロイヤルフラッシュ 4 組の 20 枚に何でもよいカードを 5 枚加えた 25 枚を使うと、5 つのパイルにディーリングしたとき、どれかのロイヤルフラッシュが、4 組以上に分散する確率が 99% になります。ロングの原案よりも、はるかに成功率が上がるというおまけがつけました。

* 準備 *

ロイヤルフラッシュ 4 組と何でもよいカード 5 枚、以上 25 枚を使います。この組合せを抜き出しておき、パケットトリック的に用意しておくといでしょう。

* 方法 *

相手によくシャフルさせたカードを受け取り、「これからギャンブラーの手口をお見せしよう」と言って、5 人に 5 枚ずつ配る、ふつうのポーカーのディーリングのやり方をします。

各パイルを表向きにして、広げた状態でそれぞれの位置に置きながら、その 5 枚の役を指摘します。5 つのパイルをそのように表向きにしながら、もっとも多くのパイルに分散されているマークを見つけます。クラブのロイヤルフラッシュが、3 つのパイルに 1 枚ずつ入っていて、1 つのパイルに 2 枚入っていて、最後のパイルには入っていないとします。

クラブが 2 枚入っているパイルを見て、2 枚のクラブの間に何枚のカードがはさまれているかを認知します。X枚だとします。クラブの入っていないパイルを取り上げ、閉じるときにボトムから (4-X) 枚を右にサイドジョグします。このパイルを右手のビルドポジションに持って、左手でクラブが 2 枚入っているパイルをカードが広がったまま取り、閉じるときにクラブとクラブの間のどこかにブレークを作ります。

「ギャンブラーはカードを集めながら、カードをよく混ぜます」と言って、右手のカードを左手のカードの上に置きますが、サイドジョグしている (4-X) 枚を、ブレークの間に挿入してしまいます。

以上の結果がどうなっているかという、いま重ねられた 10 枚のカードの中で、2 枚のクラブの間に 4 枚のカードがはさまった状態となっています。フェースから何枚目に上にあるクラブがあるかを記憶しておきます。たとえば上から 3 枚目にあるとします。もう 1 枚は 8 枚目にあるわけです。これから行うことは、各クラブのカードが、集めた全体の中で 5 枚ずつ離れた位置にセットすることです。

いま 2 組のパイルを重ねましたが、重ねたら必ず何回かカットします。そのカットのやり方は、つぎの通りです。いま手に持っているカードの中では、フェースから 3 枚目にクラブがあります。つぎにその上に重ねようとしているパイルを見て、そのパイルの中でクラブがフェースから何枚目に

あるかを認知します。たとえば4枚目にあるとしましょう。ですから、いま持っているパイルの下から1枚がフェースに移るようなカットを行います。もしくは、フェースの4枚が下に移るようなやり方でも結果は同じです。

そのようなカットのあと、しかるべきパイルを上重ねます。そして同じ考え方でカットを行い、あと2つのパイルを重ねます。これで5枚のクラブのロイヤルフラッシュは、5枚ずつ離れた位置にあります。最後は、そのうちの1枚がフェースにくるようにカットします。

あとはカードを相手に渡し、5人に5枚ずつディールさせます。相手の前にクラブのロイヤルフラッシュが配られます。他の4つのパイルがそれほどの役ではないのを見せたのち、相手の前の5枚を表向きにさせます。

* 備 考 *

どれか同じマークのロイヤルフラッシュが4組に分散する確率が99%ですが、万が一2枚、2枚、1枚と3組に分かれた場合には、2枚の組と0枚の組で前述の間に何枚かを挟む操作を行います。あと2枚の組と0枚の組がありますから、それらで同じことを行って、先に2組重ねた組に重ねます。最後は1枚入っている組が残っていますから、その組の中で目的のカードがある位置に合わせて、4組分をカットして重ねれば、目的の5枚が5枚おきにセットされます。

加藤英夫のホームページ

<http://www.magicplaza.gn.to/>

Card Magic Magazine 第 18 号

発 行 2013 年 10 月 6 日

著 者 加藤英夫

発行者 加藤英夫

hae16220@ams.odn.ne.jp

